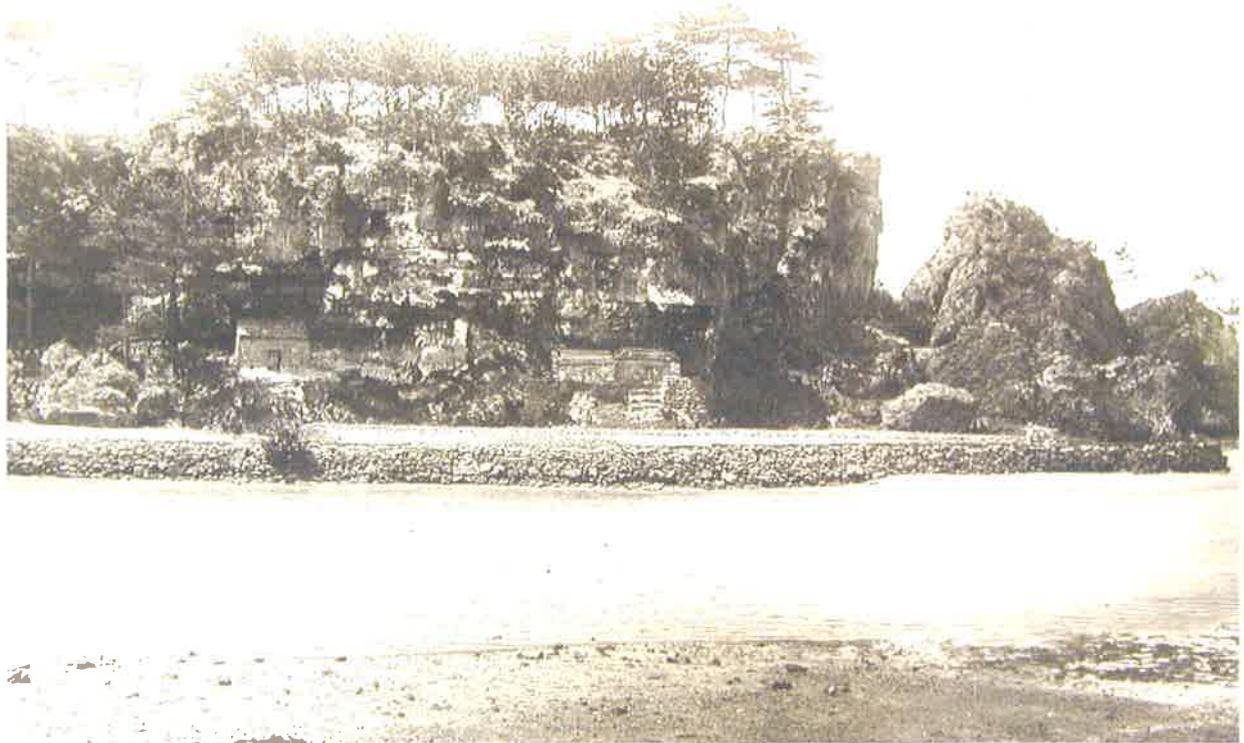


牧港岩山の宜野湾ノ口墓

－ 一般国道58号宜野湾バイパス事業に伴う緊急発掘調査 －

2001年3月

沖縄県浦添市教育委員会



▲ 戦前の牧港岩山の様子 昭和 7 年 撮影／津留泰一 熊本県立図書館所蔵

〈牧港岩山の名称について〉

沖縄本島中部から那覇方面へ国道 58 号線を南下すると、浦添市牧港にさしかかったところで、右手に石灰岩の小丘が見えます。この小丘は牧港を通る人々の目に留まり、風光明媚な場所として絵に描かれ、写真に撮られています。

この小丘は、地元（牧港）では^{ウエノバルモー}上野原毛と呼ばれ、戦前まで、三角形に海に向かって延びる丘陵でした。丘陵の頂部は、船で旅をする人の見送りの場所になっていました。しかし、戦後の開発によって丘陵の大半が消失してしまい、現在はその一角が残っています。

本市教育委員会では、今回の調査を実施するにあたり、調査地の地名「牧港」と石灰岩からなる小丘の 2 つの名称を併せて「牧港岩山」としました。

序 文

本報告書は内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所の「一般国道 58 号宜野湾バイパス事業」に伴う牧港岩山の宜野湾ノロ墓の緊急発掘調査の内容を収録したものです。

宜野湾ノロ墓は通称、「牧港岩山」と呼ばれる石灰岩丘陵の崖中腹から崖下に分布します。牧港岩山一帯は風光明媚な風景であったことから、1853 年に来琉したペリー提督の随行画家ハイネの絵をはじめ、戦前（明治～昭和初期）の絵図や写真が多く残されています。これらの絵や写真からは 3 基の古墳が確認できますが、墓の上部の大半は沖縄戦で消失してしまいました。また、墓の所有者についても不明でしたが、宜野湾市教育委員会の御教示により、同区域内に宜野湾ノロ墓が所在し、関係者もいることがわかりました。

今回の調査は、発掘調査に加え、宜野湾ノロ関係者や地域の古老からの聞き取り調査、戦前の写真資料等を手掛かりに調査・分析を行い、これまで分からなかった宜野湾ノロ墓の規模や構造などの一端を明らかにすることができました。

ところで、牧港岩山は、戦後の開発によって丘陵の大半を消失してしまいましたが、古墳が所在した一角は、戦前の絵や写真にみられる特徴を現在までよく残しており、牧港のランドマークとして広く知られていました。また、丘陵の崖面には海蝕作用によって形成されたノッチが明瞭に残り、地質観察の学習の場としても県内では数少ない貴重な場所として利用されてきました。

本教育委員会としても、このような文化遺産を可能な限り、現状保存すべく検討を重ねてきましたが、広面積の土地買上費や岩山保全の安全上の問題、計画道路の構造、地形の関係上その調整がきわめて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることとなった次第です。なお、牧港岩山から切り取られた岩塊の一部は、牧港小学校関係者の要望と南部国道事務所の御配慮により、同校庭に牧港のモニュメントとして保存されることになりました。

今後は、本報告書が多方面に活用され、学術研究及び文化財愛護思想の高揚ならびに近隣における諸開発計画の協議調整等に資することを期待します。

最後に、今調査を実施するにあたり指導・助言を賜りました諸先生方に対し、厚く御礼申し上げます。また、工事主体であります内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所の御理解と御協力により、多くの成果を上げることが出来ました。記して感謝申し上げます。

平成 13 年 3 月

浦添市教育委員会
教育長 宮 城 清

例 言

- 1 本報告書は牧港岩山に所在する宜野湾ノロ墓ほか横穴跡8基の発掘調査成果及び、聞き取り調査等をまとめたものである。また、牧港岩山をとりまく周辺の歴史的環境も視野に入れて報告すべく、戦前から現在に至る移り変わりの様子を絵や地図、写真等を用いてまとめた。
- 2 発掘調査は一般国道58号宜野湾バイパス事業に伴うもので、浦添市教育委員会が内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所から依頼を受けて実施した。
- 3 本書に掲載の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院の発行の2万5千分の1地形図及び空中写真を使用したものである。(承認番号 平12沖複、第56号)
また、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所所蔵(500分の1図)、浦添市立図書館沖縄学研究室所蔵の米陸軍工兵隊作製地図(4,800分の1図)、浦添市資産税課及び浦添市城間自治会所蔵空中写真等についても、各所の承認を得て複製し、調整して使用したものである。
- 4 本報告書の執筆、編集は安和吉則が行った。
- 5 発掘調査及び本報告書の作成にあたっては、次の方々から指導・助言、聞き取り調査、写真資料提供に協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

指導・助言 石田 肇、土肥直美、譜久嶺忠彦(琉球大学医学部)

大城逸朗(沖縄県立教育センター)

町田宗博(琉球大学法文学部)

仲田栄二(沖縄国際大学)

宮城利旭、比嘉良盛、比嘉清和(沖縄市立郷土博物館)

呉屋義勝、高江洲敦子(宜野湾市教育委員会)

玉木順彦(北谷町教育委員会)

山里奈美(西原町教育委員会)

長間安彦(浦添市立図書館沖縄学研究室)

渡慶次喜貞、渡慶次信子(宜野湾ノロ関係者)

浦添市牧港自治会、浦添市城間自治会、宜野湾市宇地泊自治会

話 者 宮里正光(大正9年生) 仲村義一(大正6年生) 以上 宜野湾市宇地泊

又吉蒲戸(明治45年生) 又吉カマド(大正4年生)

又吉栄亀(大正5年生) 又吉ウシ(大正6年生)

又吉盛秀(大正9年生) 比嘉政長(大正15年生)

仲座千代(大正10年生) 小橋川正雄(大正10年生) 以上 浦添市牧港

資料提供 沢岬勝雄 昭和10年の牧港橋改修工事写真2枚

目 次

序文（教育長あいさつ）
例言

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第2章 位置と環境	3
第1節 位置と環境	4
第2節 牧港の歴史的環境	6
第3節 牧港岩山一帯の歴史的環境	6
第3章 調査の経過	8
第4章 調査の成果	9
第1節 発掘調査成果	9
1. 3号墓	9
2. 9号横穴跡	15
3. その他の横穴跡（掘り込み跡）	15
第2節 宜野湾ノ口墓出土人骨について	17
第3節 聞き取り調査成果	19
1. 宜野湾ノ口墓	19
2. 牧港岩山	20
第5章 まとめ	22
写真図版1 発掘調査風景・出土遺物	27
写真図版2 牧港の岩山関係写真・絵図資料	42
牧港岩山の地質・植生について	73
牧港岩山の採石資料について	78
牧港岩山関係写真・絵図資料一覧表（1）	79
牧港岩山関係写真・絵図資料一覧表（2）	80

報告書抄録

挿図目次

第1図	牧港岩山の宜野湾ノロ墓の位置	3
第2図	牧港岩山の宜野湾ノロ墓と周辺の文化財	4
第3図	調査した宜野湾ノロ墓及び横穴跡と宜野湾 バイパス線の位置関係	5
第4図	大正8年・昭和48年の牧港測量図	7
第5図	3号墓平面図・墓域想定図	10
第6図	3号墓断面図及び層序	11
第7図	3号墓出土遺物	13
第8図	3号墓出土遺物	14
第9図	9号横穴跡出土遺物	16

図版目次

写真図版1

P L. 1	牧港岩山近・遠景	28
P L. 2	1号横穴跡	29
P L. 3	2～6号横穴跡	30
P L. 4	3号墓	31
P L. 5	3号墓	32
P L. 6	3号墓出土遺物	33
P L. 7	3号墓出土遺物	34
P L. 8	3号墓出土遺物	35
P L. 9	3号墓出土遺物	36
P L. 10	7・8号横穴跡	37
P L. 11	9号横穴跡	38
P L. 12	9号横穴跡出土遺物	39

写真図版2

P L. 13	遺跡一帯の空中写真 (S20)	42
P L. 14	米陸軍工兵隊作成地図 (S26)	43
P L. 15	遺跡一帯の空中写真 (S37)	44
P L. 16	遺跡一帯の空中写真 (S52)	44
P L. 17	遺跡一帯の空中写真 (H07)	45
P L. 18	遺跡一帯の空中写真 (H11)	45
P L. 19	牧港の橋と堤道 (1854年)	46

P L. 20	牧港 (T07)	46
P L. 21	牧港 (S07)	47
P L. 22	牧港風景 (S33)	47
P L. 23	明治時代の風俗 (明治年間)	48
P L. 24	明治末頃／山原船と牧港橋	49
P L. 25	明治末頃／牧港岩山と墓	50
P L. 26	明治末頃／牧港の入江風景	51
P L. 27	牧港の墳墓 (S07)	52
P L. 28	牧港 (S07)	53
P L. 29	牧港の墳墓 (宜野湾ノロ墓)：拡大	54
P L. 30	牧港の墳墓 (並列墓)：拡大	55
P L. 31	沖縄県中頭郡宜野湾村牧港橋 (S09)	56
P L. 32	牧港橋 (S09)	56
P L. 33	昭和10年／牧港橋補修工事	57
P L. 34	昭和10年／牧港橋	57
P L. 35	沖縄県中頭郡大謝名停留所付近 牧港の美景	58
P L. 36	牧港入江 (S10頃)	59
P L. 37	昭和20年／宇地泊の米兵	60
P L. 38	昭和20年／牧港遠景	61
P L. 39	昭和20年／牧港岩山北西部	62
P L. 40	昭和20年／軍道一号線工事	63
P L. 41	昭和23年／牧港遠景	64
P L. 42	昭和23年／牧港橋とポンプ場	64
P L. 43	昭和27年／牧港橋	65
P L. 44	昭和27年／牧港岩山	65
P L. 45	牧港橋 (S32)	66
P L. 46	牧港 (S36)	66
P L. 47	牧港 (S30代)	67
P L. 48	昭和40年代／牧港川河口	67
P L. 49	昭和50年頃／牧港岩山南東側	68
P L. 50	昭和50年頃／牧港岩山	69
P L. 51	昭和50年頃／タンク墓	70
P L. 52	昭和50年頃／牧港岩山北西側	70
P L. 53	昭和50年頃／横穴跡	71
P L. 54	昭和50年頃／横穴跡	71
P L. 55	牧港入江 (S56)	72
P L. 56	牧港入江 (H07頃)	72

第 1 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

この牧港岩山の宜野湾ノロ墓の発掘調査は、一般国道 58 号宜野湾バイパス線の道路改良工事に先立つものである。経緯は次のとおりである。

- 1) 平成 11 年 12 月 16 日付け、沖縄開発庁総合事務局南部国道事務所長から浦添市教育委員会教育長あて、一般国道 58 号宜野湾バイパス事業区域における埋蔵文化財有無の照会があった。
- 2) 平成 12 年 2 月に現地を踏査し、人為的な横穴（掘り込み）跡 9 基を確認した。また、戦前の絵や写真から、同区域に古墓を 3 基確認した。
- 3) 平成 12 年 2 月末に、宜野湾市教育委員会の情報により、同区域には宜野湾ノロの墓が所在したことがわかった。
- 4) 平成 12 年 2 月 28 日付け浦教文第 171 号で、教育長から沖縄開発庁総合事務局南部国道事務所長へ、同区域内に埋蔵文化財があること、開発前に文化財保護法の手続きと発掘調査を要すること、発掘調査の予算措置を要することを回答した。
- 5) 平成 12 年 3 月に双方調整を行い、平成 12 年 3 月 8 日付け浦教文第 171 号で、教育長から南部国道事務所嘉手納国道出張所長へ、平成 12 年度の本発掘調査に先立ち埋蔵文化財の範囲を確定するため試掘調査の実施について協力依頼の文書を送付した。
- 6) 嘉手納国道出張所長から調査の快諾を得て、平成 12 年 3 月 22 日～3 月 28 日の期間で調査を実施した。
- 7) 平成 12 年 3 月中頃から 4 月初頭で双方調整を重ね、4 月中頃から 6 月中頃まで約二ヶ月間の発掘調査を実施し、平成 12 年度内で調査報告書まで刊行することとした。
- 8) 平成 12 年 4 月 18 日に本件に関する委託契約書で、履行期限を平成 12 年 4 月 19 日～平成 13 年 3 月 30 日の契約を締結した。
- 9) 平成 12 年 4 月 18 日付け浦教文第 15 号で、沖縄県教育委員会あて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。
- 10) 平成 12 年 4 月 26 日付け、沖縄県教育委員会教育長から工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は保存等に別途協議することとの通知があった。

第 2 節 調査体制

本件に関する契約事務及び発掘調査等は受託者の浦添市教育委員会が行った。調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教 育 長	福山朝秀（平成 11 年度）
	”	”	宮城 清（平成 12 年度）
事業所管	教 育 部	部 長	銘苅紹夫
事業総括	教育部文化課	課 長	安里 進
事業調整	”	文化財係長	下地安広
事業事務	”	文化財係	村山みき
調査員	”	文化財係	安和吉則
発掘作業員	浦添市シルバー人材センターから派遣		
整理作業員	新城貴之、島袋盛広		
調査協力者	佐伯信之、北條真子、斎藤真吾、島袋 貴（以上、文化課文化財係）		
指導・協力者	例言に掲載した。		

第 2 章 位置と環境

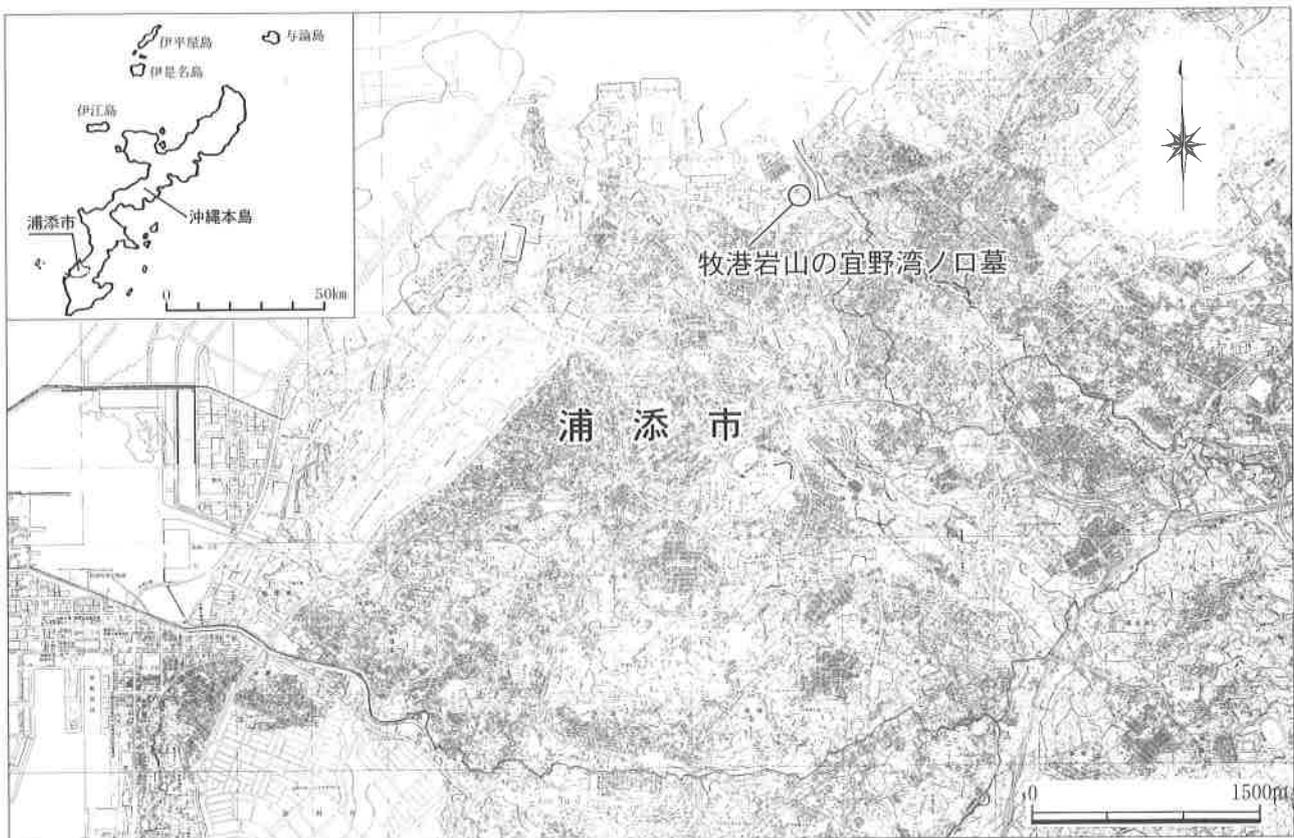
第 1 節 位置と環境

浦添市は、県都那覇市の北側に位置し、東側に西原町、北側に宜野湾市が隣接している。西側は東中国海に面しており、遠くには慶良間諸島を望むことができる。市域は東西 8.4km、南北 4.6km で総面積は約 19km²である。

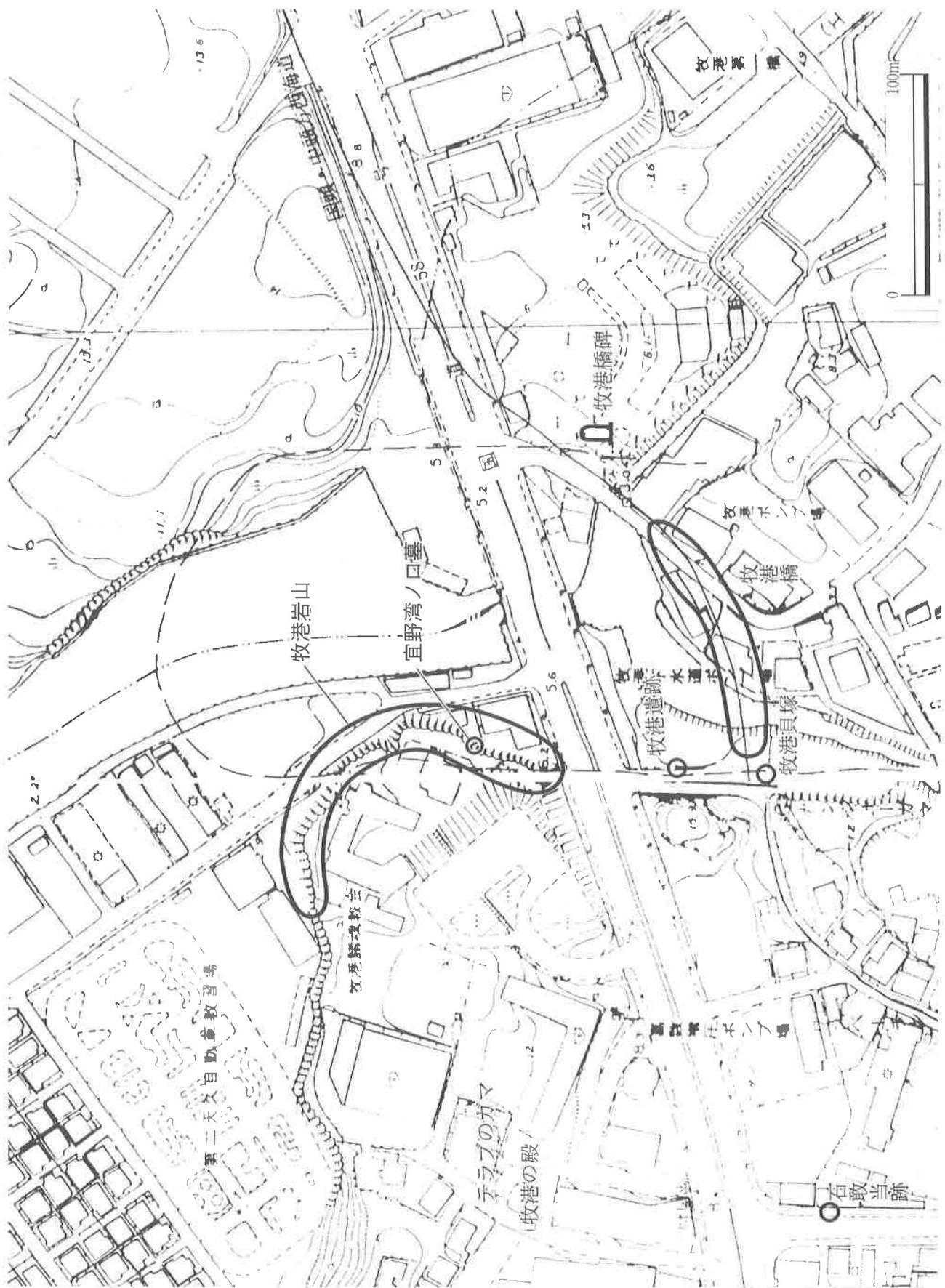
宜野湾ノ口墓は、市の北西に位置する字牧港小字上野原にある通称「牧港岩山」と称される小丘に所在している。牧港岩山は標高約 25 m 程で琉球石灰岩を基盤としている。また、牧港は総面積約 1.6km² で 12 の小字からなり、北東側は宜野湾市宇地泊と接し、比屋良川と牧港川の二支流で市境をなしている^{註1}。

戦前の牧港岩山は、平面観が北を頂点とした三角形状に延びる独立丘陵を形成し、その頂部には松林が生い茂っていた。また、丘陵には大きな亀裂が認められ、病気の豚や家畜等を捨てた場所だったことから、地元では「ウァグァーバンタ」と呼ばれた。宜野湾ノ口墓は、この丘陵の崖中腹～崖下の海蝕作用（＝ノッチ）で窪んだ所に所在した。

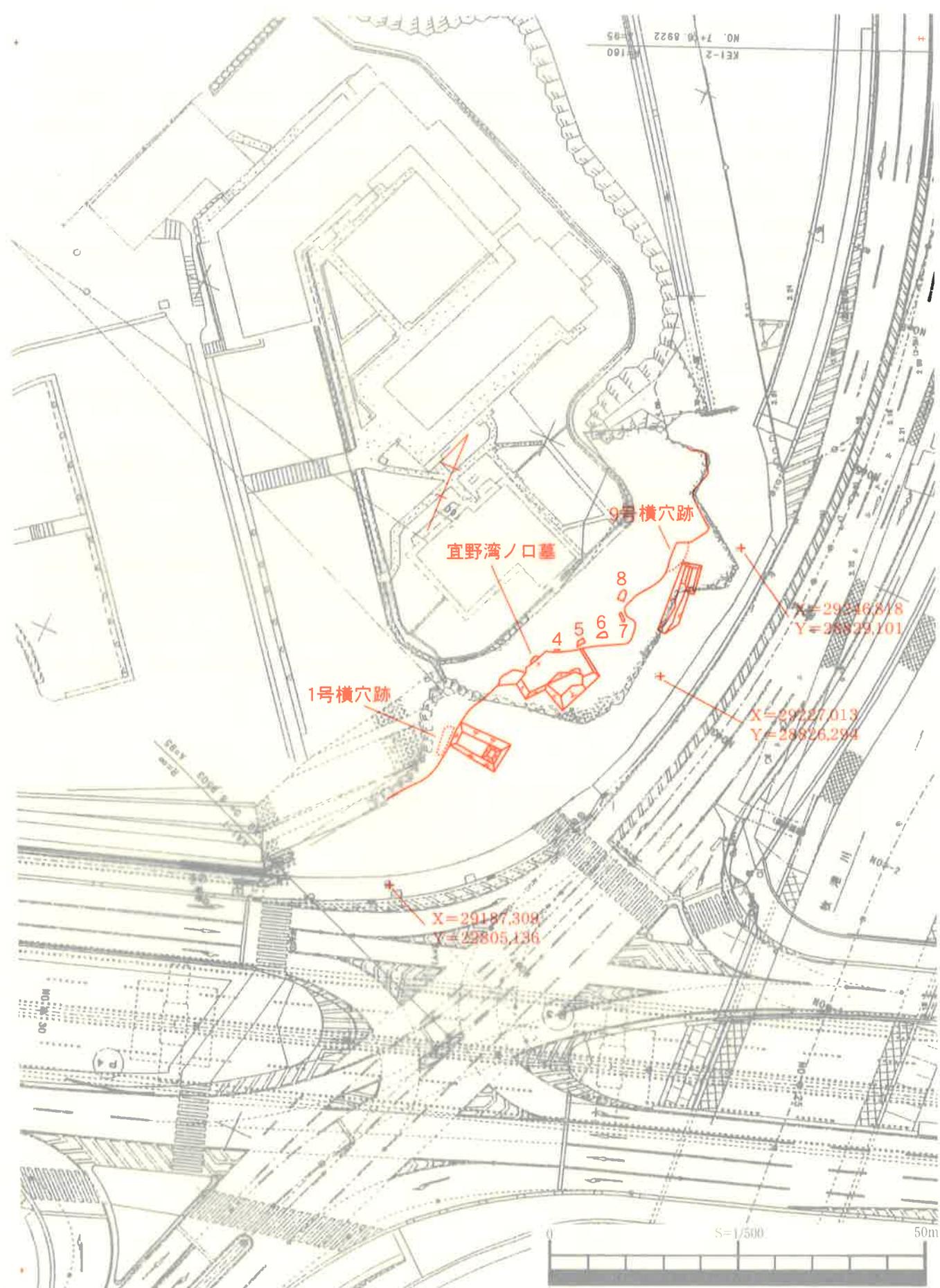
現在、牧港岩山の南側は国道 58 号線が、北側には宜野湾バイパス線が走り、西側から東側は住宅や工場、北西側は埋め立てによって牧港自動車学校や住宅、漁港が所在している。また、丘陵の頂部は、教会建設を経て、駐車場となっている。こうした戦後の諸開発によって、丘陵の南側大半が失われ、戦前に比べ約 5 m も盛土造成されてしまったが、辛うじて、ウァグァーバンタや古墓が所在した丘陵の一角が残っている。



第 1 図 牧港岩山の宜野湾ノ口墓の位置



第2図 牧港岩山の宜野湾ノ口墓と周辺の文化財



第3図 調査した宜野湾ノ口墓及び横穴跡と宜野湾バイパス線の位置関係

第 2 節 牧港の歴史的環境

かつて牧港は天然良好の港湾を有し栄えたといわれ、古くは為朝伝説に「マチナト」の由来などがあり、度々、沖縄の歴史舞台に登場した重要な地域の一つとして位置づけられてきた。また、「牧港」の地名については、近世琉球期の文献資料等^{註2}に『喜安日記』（1621～40年）に「真比湊」、『絵図郷村帳』（1646年）に「まきミなど村」、『琉球国由来記』（1713年）に「牧湊村」と記されている。

戦前まで集落の中心地は小字牧港原（現在の国道58号線が横断する付近）であったが、戦後は、軍道一号線建設で接収され、現在の小字桃原に移動して新集落を形成している。

牧港の埋蔵文化財及び包蔵地^{註3}は、牧港貝塚や牧港第二貝塚、牧港伊礼原遺跡（沖縄貝塚時代後期）、牧港遺跡（グスク時代～近代）、牧港上野原古墓群（近世）などが確認されている。

第 3 節 牧港岩山一帯の歴史的環境

戦前の牧港岩山一帯は土地利用図^{註4}によると、大半は畑地と墓地で、牧港橋や軽便鉄道が走る交通の要路であった。

牧港橋は、中国の馱背橋形式を取り入れた七座を有する橋で牧港と宇地泊の間に注ぐ牧港川と比屋良川に架橋された。橋の築造年代は不明だが、『球陽』^{註2}によると、万暦年間（1573～1620年）に「牧港杠」の記述が、また、『改修牧港橋碑』（1744年建立）^{註5}では、1735年に木橋から石橋への改修が記されている。同碑には石橋改修後の補修記録も追記されており、古くから沖縄本島中北部と南部を結ぶ西海岸の重要路であったことがわかる。また、古墓の所在した牧港岩山や牧港橋、入江の様子は、多くの写真や絵図資料^{註6}が残されており、この地が風光明媚な景観であったことに加え、人々の往来の多い場所であったことを証明している。これらの戦前の写真や絵図資料からは、牧港岩山の3基の古墓が確認できる。

註1：牧港字誌編集委員会 平成7年3月 『牧港字誌』 浦添市牧港自治会

註2：浦添市史編集委員会 1981.3 『浦添市史第2巻 資料編1 浦添の文献資料』 浦添市教育委員会

註3：浦添市教育委員会 平成2年3月 『浦添市文化財悉皆調査報告書』

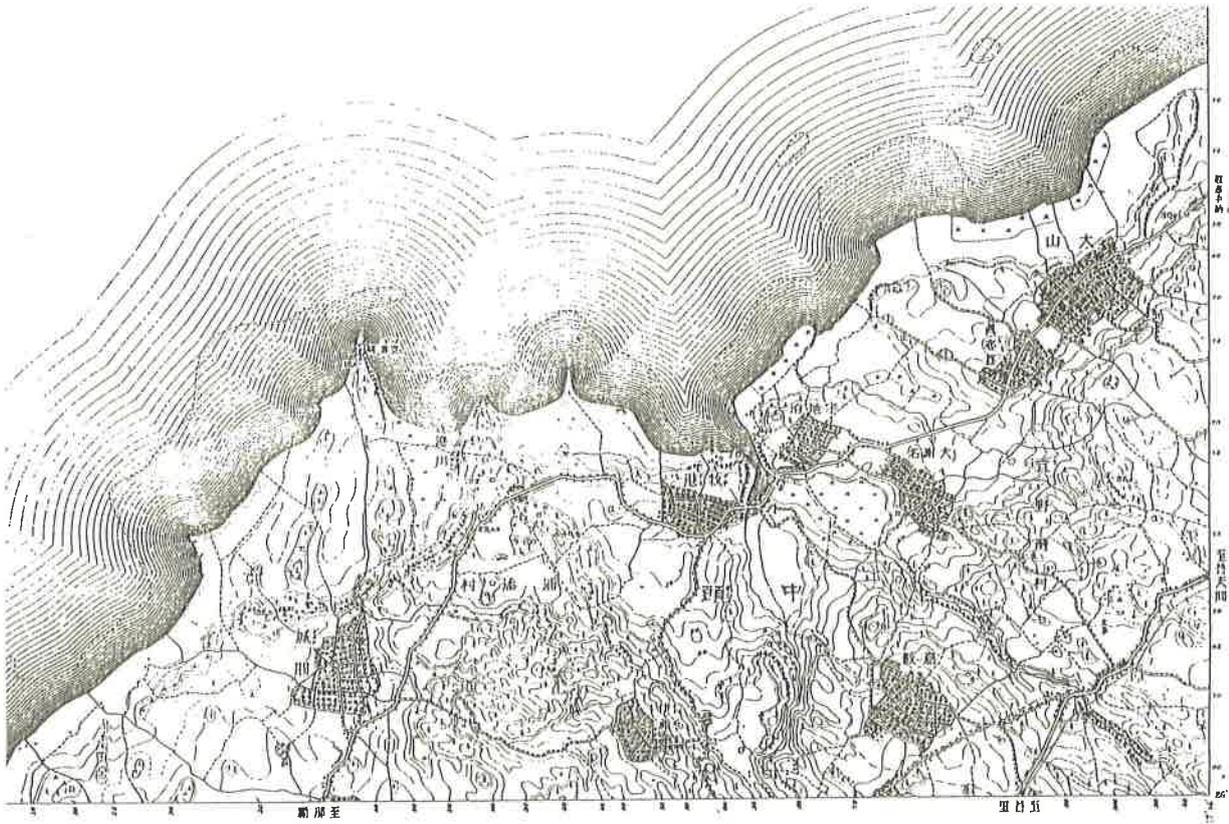
：浦添市教育委員会 昭和55年3月 『うらそえの文化財－遺跡分布調査報告－』

：牧港伊礼原遺跡は、平成9年11月17日に沖縄銀行新事務センター増設工事中に発見され、緊急発掘調査を実施した。

註4：浦添市史編集委員会 1986.3 『浦添市史第6巻 資料編5 自然・考古・産業・歌謡』 浦添市教育委員会

註5：浦添市史編集委員会 1989.3 『浦添市史第1巻 通史編 浦添のあゆみ』 浦添市教育委員会

註6：浦添市史編集委員会 1988.3 『写真にみる浦添のあゆみ－明治から昭和62年－』 浦添市教育委員会



▲「牧港」大正8年測量 同10年2月25日発行



▲「大謝名」昭和48年測量 平成11年修正測量



第4図 牧港測量図 (S = 1/25,000) 国土地理院発行

第 3 章 調査の経過

工事予定地内には、人為的に掘り込まれた横穴跡が 9 基所在した。これら横穴跡のいずれかは、戦前の絵や写真にみられる 3 基の古墓の可能性があった。調査の便宜上、9 基の横穴跡を、南側から北側に順に 1～9 号の番号を付して調査に取りかかった。

ところで、同区域内は、第 1 章で先述したとおり、先に実施した試掘調査結果から、戦後、約 3～5 m 盛土造成されていることがわかった。亀裂部からは沖縄産陶器や豚、鳥などの獣骨が採取された。

発掘調査は平成 12 年 4 月 25 日から同年 6 月 19 日の期間で実施した。

調査は、現況の写真撮影を済ませ、工事予定地内（＝調査区内）の低草木の除去作業及び清掃作業から着手した。清掃後、調査区内の測量を実施し、併せて、横穴跡 9 基の割付を行った。割付は横穴跡を二等分するかたちで縦軸を設け、これと直角に横軸を設定した。

発掘は、墓に伴う遺構を検出する作業が主であったが、試掘調査データによる調査区内の 3～5 m の造成土を全て掘削することが困難であったため、現況と戦前の写真・絵図資料等を比較検討し、また、墓所有者との現地立ち会いや聞き取り調査を踏まえて墓域の可能性が高い場所を選定し、三ヶ所でトレンチ掘りを行うこととした。その際、トレンチ調査は個々で完掘し、遺構確認後、面的に広げることとした。なお、トレンチは 1・3・9 号横穴跡の前面に設定し、機械掘削（バックホウ）及び人力掘削で造成土の除去及び遺構確認を行った。各トレンチについて以下で記述する。

今回調査した三ヶ所のトレンチ全てにいえることだが、約 3～5 m の厚く堆積した造成土を占める殆どの土が、灰色系シルト質の粘性土であった。沖縄では一般的に「クチャ」と称される土で元来、この場所にある土ではなく明らかに客土であった。

はじめに、1 号トレンチの発掘に着手した。トレンチは 1 号横穴跡の直下から東側と北側に対し、5×3 m を設定した。地表下約 1.5 m の掘削で石灰岩の岩盤に達し、岩盤は東側に約 4 m 延びて落ち込み、地表下約 3 m に達した。ここでは墓に伴う遺構や遺物は確認されなかった。

次に、3 号トレンチの発掘に着手した。同トレンチも 1 号トレンチ同様、3 号横穴跡の直下から東側と北側に対し、5×4 m を設定した。土の堆積状況から、東側に地形がやや下っており、地表下 30～60 cm の掘削で石灰岩の岩盤に達した。岩盤は東側に約 3 m 延びて落ち込み、地表下 2 m 程で 50～80 cm 大の石灰岩の集石が確認された。また、現代遺物と混在して厨子甕の破片や人骨片等が出土した。そのため、トレンチを北側に拡張して遺構確認を行うこととした。3 号トレンチ北側を機械掘削で拡張し、人力掘削に入る頃、9 号トレンチの掘削作業も同時に着手した。ここでは、清掃中に蔵骨器破片やキセルの雁首、人骨片等が戦争遺物等と一括表採されたが、周辺が著しく攪乱されており、墓に伴うものと思われる切石が数個出土するが、遺構は確認できなかった。

今調査で、最も調査時間を費やしたのは 3 号トレンチであった。作業は遺構確認後にトレンチを西側に拡張し、3 号横穴跡を二分した縦軸ラインを中心に、2×2 m のグリットを設定し、堆積土の除去作業、遺物の取り上げ、遺構検出、実測、写真撮影を行った。しかし、古墓の造成状況については、検出した遺構及び基盤である石灰岩の大部分が攪乱をうけていることもあって、詳細はつかめなかった。

第4章 調査の成果

第1節 発掘調査成果

発掘調査した1・3・9号横穴跡の前面部トレンチのうち、3号トレンチで墓に伴う遺構が確認された。遺構は墓室奥壁、床面、棚跡、墓庭造成の根石跡で、これらから3号横穴跡を墓跡（＝3号墓）として捉えた。

1. 3号墓

(1) 層序

第1層：赤色細砂層。粘質。表土。遺物は認められない。

第2層：白色粗砂層。砂質。コンクリート敷きや基礎が一部で認められる。

第3層：黄白色系細礫土層。砂質。第2層のコンクリート敷きのための造成土と思われる。

第4層：灰色シルト層。粘質。「クチャ」と呼ばれる土。軍道一号線建設か以後の周辺開発に伴う客土と思われる。一部で黄褐色砂質土が混在。現代遺物（プラスチック）が出土。

第5層：黄色小礫土層。粘質。石灰岩基盤直上土だが、大半が攪乱される。マンガン釉甕形厨子甕破片や沖縄産陶器片、人骨片などが出土。石灰岩基盤が地形的に傾斜し落ち込むところでは、50～80cmの石灰岩の集石と混在して認められることから墓庭造成層と考えられる。

第6層：黒色小礫土層。珊瑚片や貝殻が混在。青磁や人骨片などが出土。当初、遺物包含層と想定されたが、遺物が少ないことや第5層の状況から戦前の表土面と判断された。

第7層：黄褐色小礫土層。珊瑚片や貝殻が多く混在する。グスク土器、貝錘などが出土。また、同層内では4層（層厚2～4cm程）に分層できるが、土色が異なる以外、土質はほぼ同じで、層厚が非常に薄いため同一層としてとらえた。同層はグスク時代から概ね戦前まで段階的に形成される表土層と判断された。

なお、調査終盤にトレンチ内の一部を更に掘り下げたが地山は確認できなかった。また、遺構や遺物も第7層の下層からは確認できなかった。

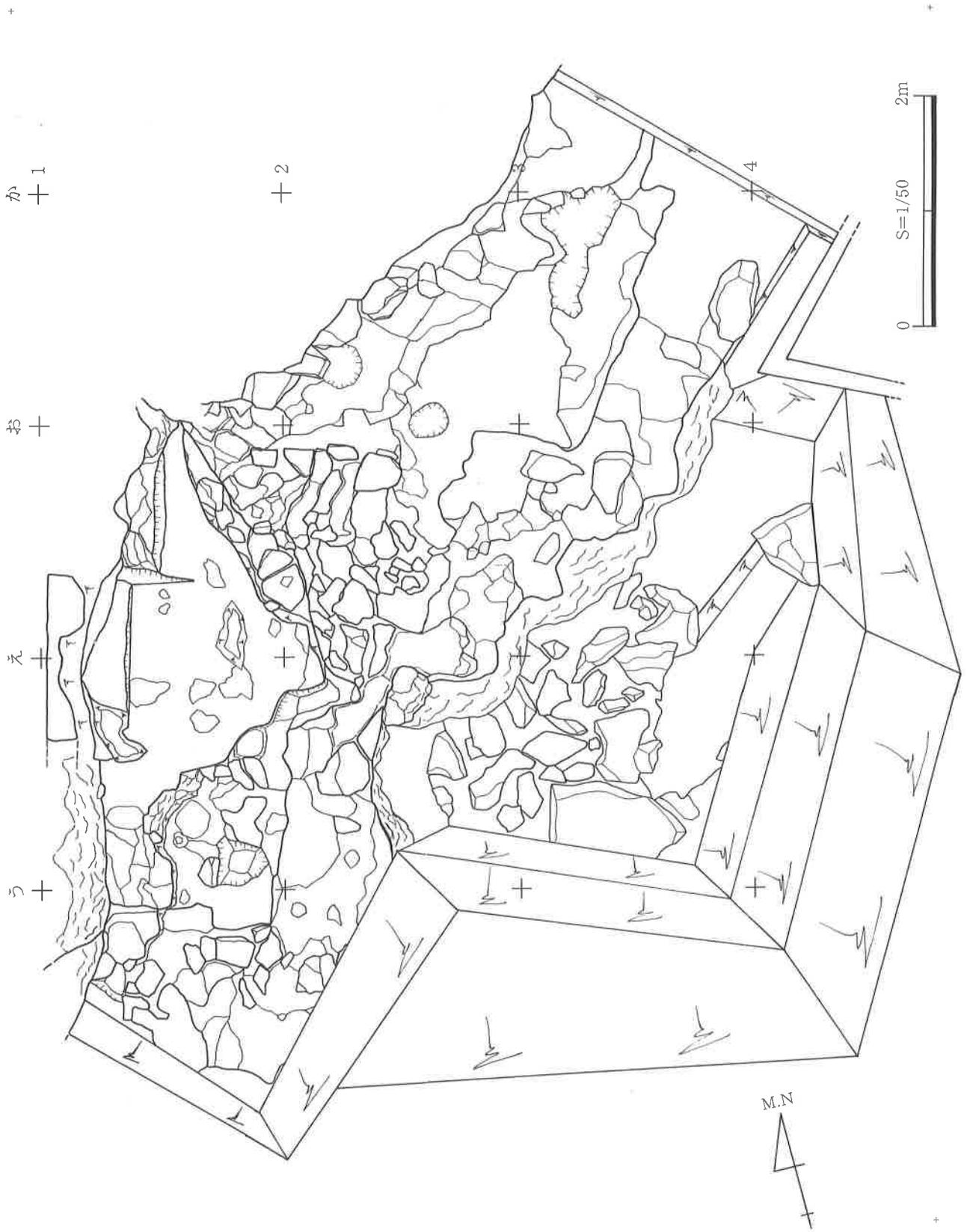
(2) 墓の構造

墓室、墓庭ともに基盤石灰岩まで戦後の造成で攪乱されており、確認できる根石部分と床面から墓域の復元プランを試みると、平面形態は長辺約4.5m、短辺約3mの長形状を呈する。

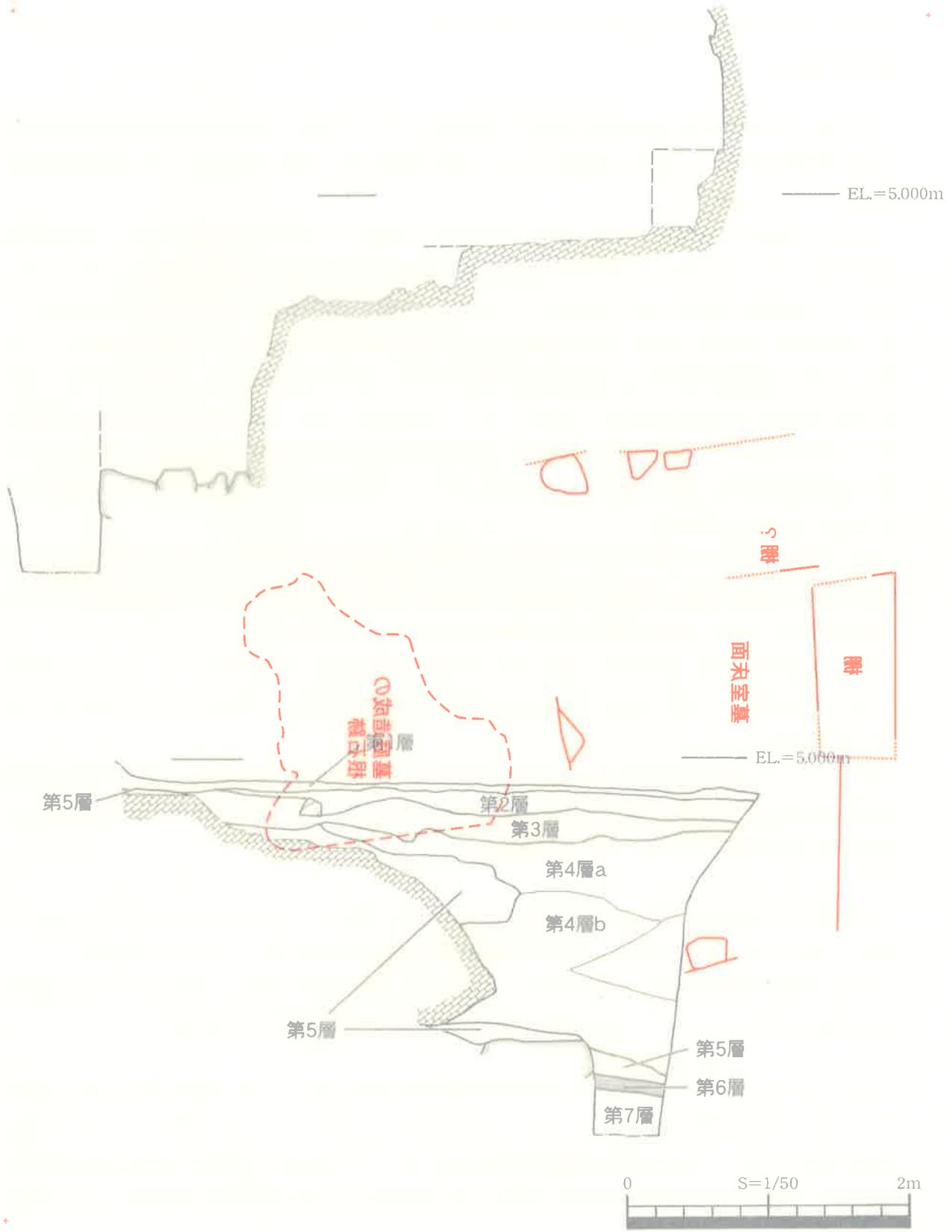
奥壁及び棚跡、床面は全体的に細かいノミ痕を残し、丁寧に加工される。奥壁直下には高さ10cm程の浅い棚の立ち上がりが認められた。棚の上面がほぼ水平に加工されていることから石積みによる棚の構築が想定された。床面は奥壁に対し東側（墓口側）に270cmを測る。また、中央棚の北側（奥壁に向かって右側）でも、僅かに壁面が立ち上がるため、棚が想定された。一方、南側（奥壁に向かって左側）では同様の痕跡は無いが、地形や空間的制限が無い限り、左右対称に棚を構築した可能性が高いと思われた。墓室床面の標高は約5m。

奥壁の上端部には、「L」字状の取っかかりが認められた。位置的に屋根の裏側部にあたることから、屋根の先端部を乗せるためのものと思われ、破風墓の可能性が高いと判断された。

墓室前面部の約2.5m下では、墓庭造成時の根石跡と思われる石灰岩の集石が出土した。集石は長径50～80cmで角は丸く上面がやや平坦面を保つ。墓室は基盤石灰岩に造られるが、基盤の地形的な落ち込みで墓庭のスペースが殆どないため、石灰岩基盤に接するように石を積み上げて造成して、墓庭を構築したと推測する。



第5図 3号墓平面図 墓域想定図



第6図 3号墓断面図及び層序

(3) 出土遺物

出土遺物は、いずれも明確な遺構に伴うものはないが、客土（盛土造成）層下の石灰岩基盤直上から出土したものや戦前の表土面及びその下層から出土したものである。なお、戦中以降及び近現代の遺物は割愛した。

第7図1は白磁外反碗の底部破片資料で、高台径は6.5cmを測る。素地は灰白色の粗粒子で内外面に薄い透明釉を施し、高台脇から露胎となる。釉色は淡灰白色。内底に印花文と一条の圏線が認められる。えー3、6層出土。

2・3・5は青磁の破片資料である。2は、杯の口縁から腰部にかけての破片資料である。素地は淡灰白色の微粒子で、内外面に薄い透明釉が施される。釉色は淡緑色を呈する。内外面ともに細かい貫入が走り、口縁部から腰部にかけて篋削りによるやや不明瞭な沈線が認められる。えー3、6層出土。3は、盤の鏝部（口縁部～腰部）の破片資料である。素地は白色にやや黄色掛かる緻密な微粒子で、内外面とも厚い透明釉が施される。釉色は淡い緑色でガラス質状の発色を呈する。鏝を平坦に仕上げた稜花盤で内体面に幅広の篋で蓮弁文を描く。えー3、6層出土。5は、無鎬蓮弁文碗の底部から腰部にかけての破片資料で、高台径4.6cmを測る。素地はやや黄色がかる淡灰色の微粒子で、内外面にやや厚い透明釉が施され、暈付は露胎となる。釉色はオリーブ色を呈する。内底面に弱い一条の圏線が認められる。えー3、6層出土。

4は、緑釉陶器の破片資料で水注の口縁部と思われる。素地はやや黄色味を帯びる白色微粒子で、口唇部の約1/2外面に緑釉を施す。口唇部内面は露胎となるが、二次的な焼成のためか口唇部の約2/3が黒色を帯びている。施釉部に粗い貫入が認められる。おー1、4層出土。

6は、青銅製の切羽で、長径4.5cm、短径2.3cm、厚さ約1.5mmを測る。重量は約11.5g。えー3、6層出土。

7は、寛永通宝で、直径2.5cm、厚さ0.1cmを測る。重量は約4.3g。裏面に文字は見られない。えー3、6層出土。

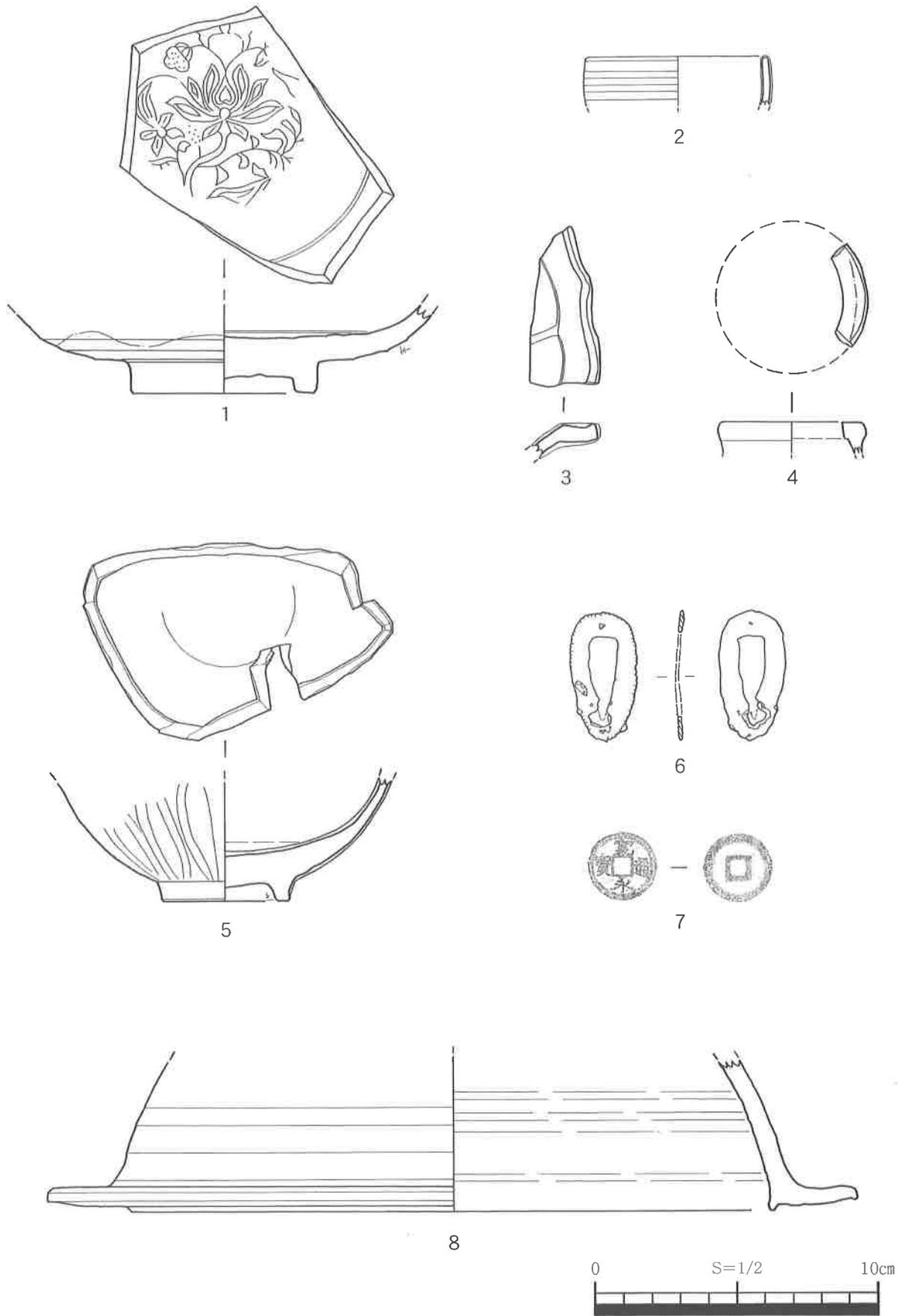
8は、マンガン釉甕形厨子甕の蓋（鏝部）の破片資料である。推定外径28.6cm、内径22.8cmを測る。外面を回転横ナデで成形し、マンガン釉を施す。身の口縁部からずれ落ちるのを防ぐための「かえり」が鏝部の内面下端に取り付く。かー2、4層出土。

第8図1～5は有孔貝製品で、用途は錘と思われる資料である。1・2はヒメジャコで、3・4はメンガイ、5はリュウキュウサルボウ。いずれも内面中央の凹部から孔を穿つ。えー3、7層出土。

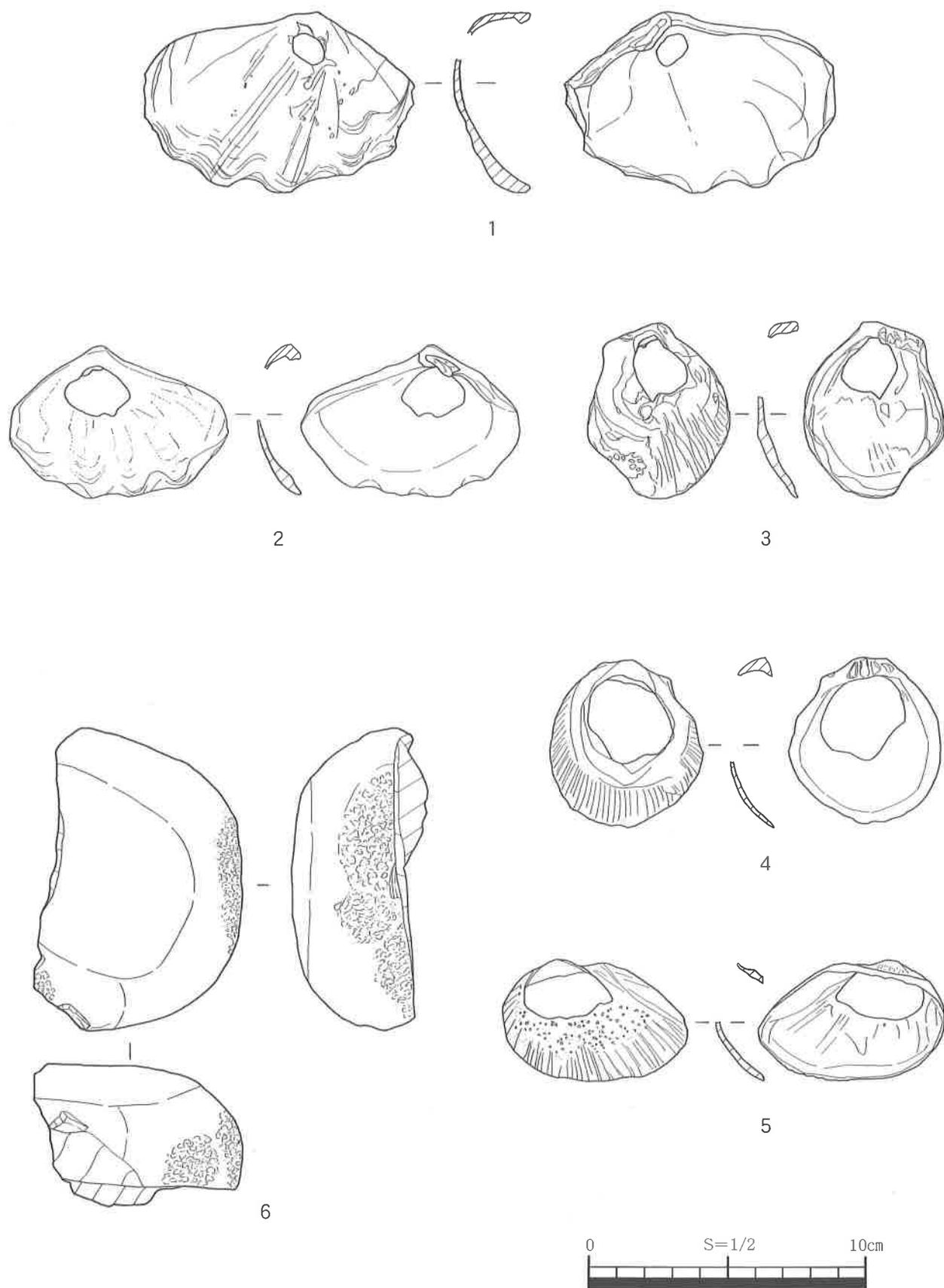
6は、片状砂岩製の敲石で、長径11.0cm、短径7.0cm、厚さ4.5cmを測る。重量は570g。楕円形の自然礫を素材とするもので、側面を敲打部位として使用する。えー3、5層出土。

PL.7の1・2はマンガン釉甕形厨子甕の身の胴部破片資料である。1は、外面に沈線で葉文を描き、その下部に4条の横帯が認められる。内面の色調は泥灰色を呈する。うー1、5層出土。2は、外面に沈線で蓮華文を描く。内面の色調は赤橙色を呈する。えー2、5層出土。両者は、内面の色調が異なることから、別個体の破片資料と思われ、少なくとも2種類のマンガン釉甕形厨子甕があったと判断される。

PL.8は、グスク土器の胴部破片資料である。器種は不明。いずれも焼成は良好で硬質。色調は、外面が暗褐色や淡橙色で、内面は橙系色である。内外面ともに、1～2mm程の石灰砂や赤色粒子を含む。1・4は内面に不明瞭な篋削痕が認められ、器面はアバタ状を呈する。えー3、7層出土。



第7図 (PL6) 白磁:碗(1) 青磁:小杯(2)・盤(3)・碗(5) 緑釉陶器(4) 切羽(6) 古銭(7) 蔵骨器:マンガン釉甕形(8 PL7. 3)



第8図 (PL.9) 有孔貝製品:ヒメジャコ(1・2)・メンガイ(3・4)・リュウキュウサルボウ(5) 石器:敲石(6 PL.8)

2. 9号横穴跡

戦前の絵や写真から、同場所には並列する2基の古墓が確認できる。

トレンチを設定し、遺構確認を実施したが、基盤石灰岩まで著しく攪乱されており、墓の規模や構造等を窺い知る情報は全く得られなかった。

(1) 遺物

いずれも石灰岩基盤上の一括遺物で、ポージャー厨子甕破片、キセル雁首、人骨片などのほか戦中遺物も出土した。なお、近現代、戦中遺物については割愛した。

第9図1～3は、ポージャー厨子甕の身の破片資料である。

1は、口縁部から肩部の破片資料で、口径約18.8cmを測る。口縁部は丸縁で内湾し、口唇部がガラス質状を呈する。重ね焼きの際、口唇部にサンゴ小石を置いて焼成した結果、サンゴ石の石灰分が溶けてガラス質状になったと思われる。色調は、外面が涅色（褐色がかった黒色）、内面は鳶色（黒みがかった茶色）を呈する。外面の頸部横帯は3条の凹線が入り、凹線下端部には5mm程の瘤状突起が認められる。内面は回転横ナデで器面調整される。

2は、口縁部から肩部の破片で、口径約30.4cmを測る。口縁部は丸縁で内湾する。色調は、外面が暗茶褐色で内面は赤味がかった橙色を呈する。外面の頸部横帯は3条の凹線。内面は回転横ナデによる器面調整が認められる。素地は赤色系微粒子で緻密。

3は、胴下部から底部の破片資料で、推定底径約23.3cmを測る。色調及び素地が2と同じであるため、両者は同一個体の可能性が高い。底部の穿孔は2ヶ所認められる。内面は回転横ナデで器面調整される。

4は、陶製キセルの雁首である。火皿及び羅宇接合部の断面形がほぼ八角形を呈する。素地は暗灰褐色の緻密な微粒子で、色調は内外面とも灰褐色を呈する。火皿が全体的に大きく、成形がやや雑。器面に篋状工具によるやや幅のある筋状の調整痕が認められる。重量は約11g。

5は、金属製キセルの雁首である。火皿及び羅宇接合部の断面形がほぼ円形を呈する。錆による青銅色を呈している。羅宇接合部から首部にかけては一枚の薄い金属板を管状にして成形している。重量は約6g。

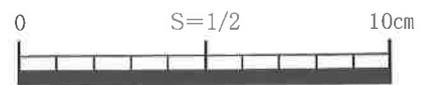
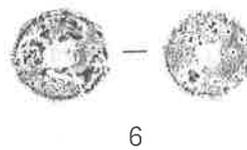
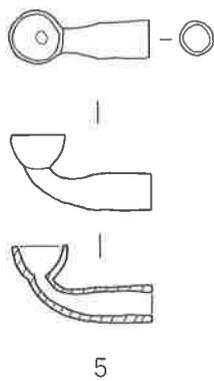
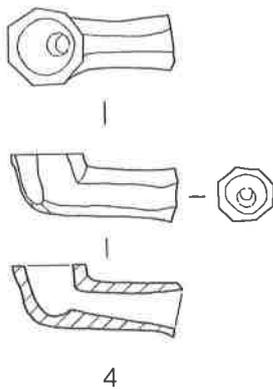
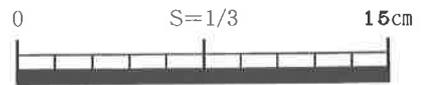
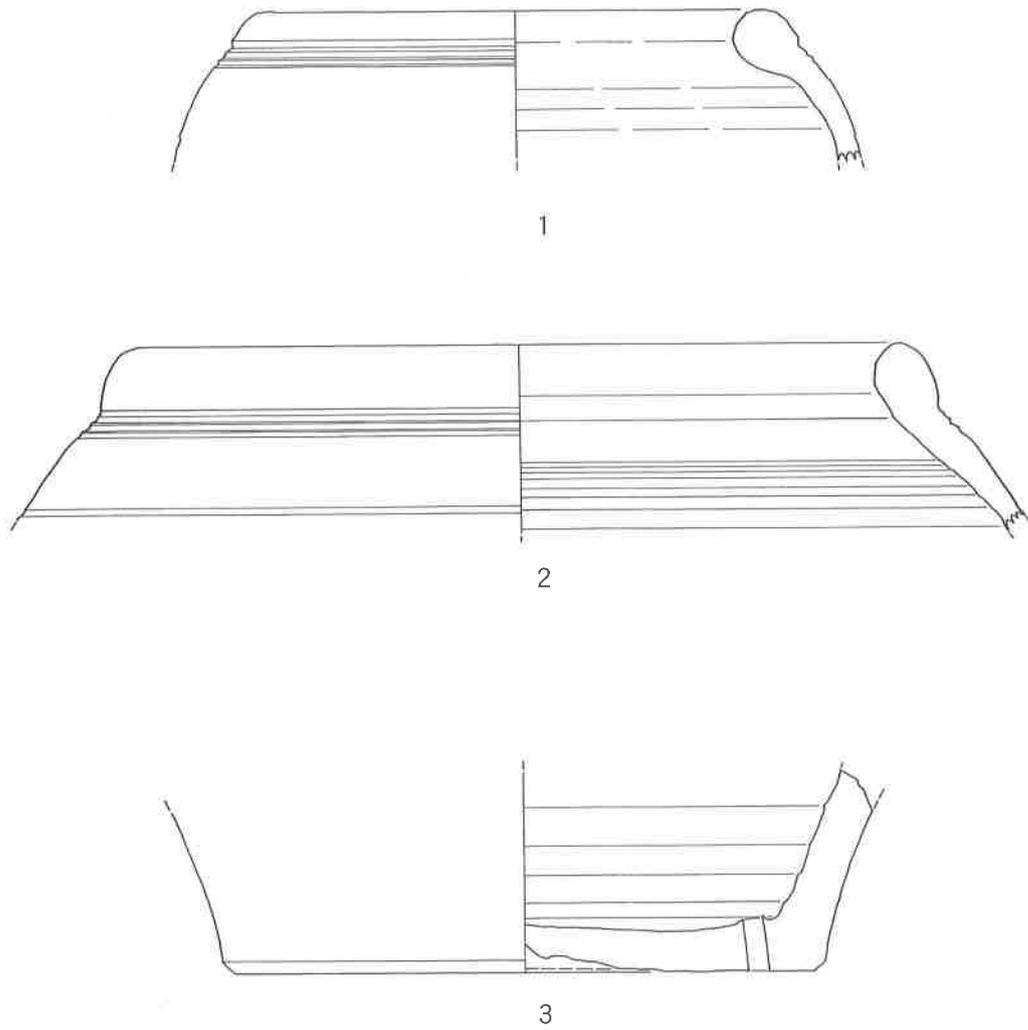
6は、銭貨で、直径2.5cm、厚さ0.1cmを測る。重量は約2.8g。表裏面とも銅錆が著しく文字は判読不能である。

3. その他の横穴跡（掘り込み跡）

調査した1・2・4・5・6・7・8号横穴跡は、いずれも判然としなかった。各々を概述すると1号横穴跡は、立面形態から墓の可能性を残しているが不明。2号横穴跡は、清掃後に石灰岩基盤の地形的な自然の窪み部分で人為的に掘り込まれた跡ではないと判断された。

4～6号横穴跡は、戦前の写真でも認められており、沖縄戦以前に掘り込まれた横穴と推察される。

7・8号横穴跡の同場所には、戦前の写真では二基墓に伴う石積みを確認できることから、戦中～戦後の掘り込み跡と思われる。



第9図 (PL.12) 蔵骨器：ポージャー厨子甕(1～3) キセル：陶製(4)・青銅製(5) 古銭(6)

第 2 節 牧港岩山の宜野湾ノ口墓出土人骨について

琉球大学医学部解剖学第 1 講座

譜久嶺忠彦・土肥直美・石田 肇

牧港岩山の宜野湾ノ口墓から出土した人骨について報告する。保存不良の骨細片がほとんどで、また火葬骨のため人骨の形が変形してしまっているものも含まれていたため、詳細な個体識別は困難であった。

人骨の鑑定結果を表 1 に示す。未成人は、未萌出を含む乳歯・永久歯の歯冠や歯根の形成程度から BASS (1987) 1) を参照し、年齢推定を行った。

引用文献

- 1) Bass, M.W. 1987: Human Osteology A Laboratory and field manual, third edition, Missouri Archaeological Society, Inc., Columbia.

牧港岩山の宜野湾ノ口墓出土骨の構成

墓跡	トレンチ	層位	出土地点	人骨所見	
1	No.3トレンチ	3	お-1	成人の中足骨や肋骨片等の少量の細片のみ。	性別不明成人 1
		5	え-2・3、お-3	成人の右肩甲骨片、大腿骨片、脛骨片等の少量の細片のみ。焼けた人骨含む。	性別不明成人 1
		5	え・お-1・2	頭蓋骨片、左上腕骨片、左右大腿骨片、脛骨片、左腓骨片等。焼けた人骨、獣骨含む。	成人男性 1
		3	お-1	頭蓋骨片、右上腕骨片、大腿骨片、腓骨片等。焼けた人骨含む。	成人男性 1
		5	お-1・2	左側頭骨片、右大腿骨片、左寛骨片等。焼骨・焼けた人骨含む。	成人男性 1
		3	お-1・2	大腿骨片、右第1中足骨など少量の細片。ほとんどが焼けた人骨。獣骨含む。	性別不明成人 1
		3	お-1・2	頭蓋骨片、左上顎第1大臼歯、左大腿骨片、脛骨片、腓骨片等。ほとんどが焼けた人骨。	性別不明成人 1
		5	お-1	頭蓋骨片、上顎骨片、下顎骨片、左上腕骨片、右尺骨2片、左右大腿骨片、脛骨片、左?腓骨片、幼児の左上顎側切歯等。ほとんどが焼けた人骨。	成人男性 1、性別不明成人 1、幼児 1
		5	え-2	左頬骨片、左側頭骨片、下顎骨片、左右上腕骨片、肩甲骨片、左腓骨片、右距骨片等。ほとんどが焼けた人骨。	熟～老年女性 1
		3	お-1	左鎖骨片、大腿骨片、腓骨片等。焼けた人骨含む。	性別不明成人 1
		5	う・え-2	頭蓋骨片、左右側頭骨片、右上腕骨片、右大腿骨片等。焼けた人骨含む。	成人女性 1
		?	お-1	頭蓋骨片、大腿骨片、右脛骨片、腓骨片等。焼けた人骨含む。	性別不明成人 1
		5	お-2	成人の頭蓋骨片、左大腿骨片、幼児の頭蓋骨片等。ほとんどが焼けた人骨。	性別不明成人 1、幼児 1
		3	か-2	後頭骨片、下顎骨片、左上腕骨片、右大腿骨片、左?腓骨片等。焼けた人骨、獣骨含む。	性別不明成人 1
		5	え-3	大腿骨片、足根骨等の骨細片のみ。獣骨含む。	性別不明成人 1
		6	え-3	長骨片などの少量の骨細片のみ。	性別不明成人 1
		6	う-3	右第3中手骨などの少量の骨細片のみ。獣骨含む。	性別不明成人 1
		5	か-3	大腿骨片、右?腓骨片などの長骨片が4片のみ。	性別不明成人 1
		5	か-2	側頭骨片、上顎骨片、下顎骨片3、上腕骨片(右2左1)、左右橈骨片、左右肩胛骨片2、大腿骨片、脛骨片、腓骨片、幼児の下顎骨片、小児の左下顎犬歯・第1乳臼歯等。ほとんどが焼けた人骨。	成人男性 1、性別不明成人 1、小児 1、幼児 1
		?	か-2	成人の頭蓋骨片、上顎骨片、下顎骨片、左?上腕骨片、左鎖骨片、幼児の下顎骨片等。ほとんどが焼けた人骨。	性別不明成人 1、幼児 1
		6	お-3	少量の骨細片、幼児の肋骨片等。獣骨含む。	性別不明成人 1、幼児 1
		5	か-1	長骨片等の少量の骨細片のみ。焼けた人骨含む。	性別不明成人 1
		1(西壁)	う-2	肩甲骨片と長骨片のみ。	性別不明成人 1
	流土一括		左大腿骨片等。	成人女性 1	
	フィッシャー	お-1	左頬骨片、左側頭骨片、左上腕骨片、左橈骨片、右肩甲骨片、左膝蓋骨片、大腿骨片、左脛骨片等。焼けた人骨含む。	成人男性 1、成人女性 1	
	No.2トレンチ	客土～岩直上		腓骨 2 片のみ。	性別不明成人 1
	No.4(横穴)	表土		少量の骨細片のみ。	性別不明成人 1
2	No.9トレンチ	岩直上		頭蓋骨片、左頬骨片、上顎骨片、下顎骨片2、左右肩胛骨片、左右大腿骨片、脛骨片、右腓骨片、左距骨片、幼児の左尺骨片、左鎖骨片、左?腓骨片等。ほとんどが焼けた人骨。	性別不明成人 2、幼児 1

※焼けた人骨の中には収縮・変形がみられるものも含まれている。収縮・変形した人骨は火葬の可能性が考えられるが、判別が困難なため「焼けた人骨」としてひとまとめにした。

第 3 節 聞き取り調査成果

(1) 宜野湾ノロ墓について

話 者：渡慶次 喜貞（屋号「嘉手苺^{カリカ}」）明治 43 年生まれ

※渡慶次喜貞氏の曾祖母と母親はノロ代理をつとめた。二人は屋号「徳山」の娘で、亡くなると、牧港の宜野湾ノロ墓には入らずに、徳山の墓に入った。

調査日時：平成 12 年 3 月 14 日（火） 14:00 ～ 15:30

平成 12 年 3 月 27 日（月） 10:30 ～ 12:00

なお、聞き取り調査の際に、聞いた話の内容で以下の区分を行った。

○＝渡慶次喜貞氏が実際に経験した話

●＝渡慶次喜貞氏が幼少の頃に祖父母や門中の人々から聞いた話、嘉手苺門中の伝承など

○墓はヌールバカ（＝ノロ墓）と呼んだ。

●嘉手苺の娘（＝ノロ）の墓で 3 人入っている。

●牧港に宜野湾ノロの墓があるのは、牧港橋を造る時に宜野湾ノロがなんらかの手助けをしたので、牧港の人々の要望でこの場所に墓が造られた。墓を造った後も、牧港橋が修復される度に、牧港の人々によって墓石も新しく積み直しされた。

●宜野湾ノロが亡くなると、宜野湾～当山～伊祖～牧港のノロ墓への道のりを、3 日ばかりで籠を担いで葬式を出した。

●沖縄戦の直前に、日本軍の石部隊が墓からティラ（＝石製厨子甕）を出して、弾薬庫として使っていた。

○ノロ墓は牧港橋から西側に進んで、二番目の墓だった。戦前までは、毎年、清明祭のときに両親と行った。

○ノロ墓のあった場所の上には亀裂があり、大きな石が挟まっていた。

○周辺にも墓が 4 つくらいあったと思う。ほかの墓の所有者はわからない。清明祭のときもここに来るのは自分たちだけで他の人は見たことはなかった。

○戦後、墓に行くと墓の前にティラが二つあった。骨は入っていたが、ティラの蓋が無かった。

墓には 3 人入っていると聞いていたがティラは二つしかなかった。墓が壊れてしまったので、1959 年に、宜野湾ノロ墓を宜野湾市宇宜野湾小字後原にある嘉手苺の墓の隣に新築して移転した。

(2) 牧港岩山一帯

話 者：例言に記した。

調査期間：平成 12 年 3 月 30 日～同年 7 月 17 日

牧港岩山崖下の墓について（名称、墓数、特徴、戦前・戦後の状況など）

・墓の所有者はわからない。墓はとても古い。数は五つ、六つくらいあったと思う。洞穴があって、骨やジーシガーミ（＝厨子甕）でいっぱいしていたのを覚えている。

（中村義一／大正 6 年生）

・墓の所有者はわからない。大昔の墓と聞いたことがある。墓口の蓋を板で塞いでいたから、「^{イタバカ}板墓」と呼んだ。数は二つ、三つはあったと思う。夜になると板墓の方から、三線の音が聞こえるという話があってあまり近寄らなかつた。板墓があった場所は、沖縄戦の直前に日本軍の暁部隊（＝輸送部隊）が燃料置き場として使っていたらしい。

（比嘉政長／大正 15 年生）

・墓の所有者はわからない。戦前から大昔の墓と言っていた。墓は「板墓」と呼んでいた。墓口を板で塞いでいたからだと思う。墓の数は一つか、二つだったと思う。

（又吉盛秀／大正 9 年生）

・墓の所有者はわからない。墓への墓道は無く、護岸を歩いて行った。墓の前方は広場になっていて、屋号「仲座」や「^{クラニー}葎根」の畑があった。奥の方に洞穴があって、白骨が見えた。近づくのも怖かった。現在のロベルトのところにカンジャーガマと墓があって、そこにある墓を「板墓」と呼んだ。板墓に納められていた人骨は太くて、大きいので唐人が入っているといわれていた。

現在の牧港自動車学校側に、牧港の人たちの墓があった。屋号「^{マチジョウ}松門」と「^{ヌーアタイグラー}前当小」の墓のほかに、全部で五～六つあったと思う。

（又吉蒲戸／明治 45 年生）

・墓の所有者はわからない。周辺には墓が多かった。墓は「板墓」と呼んだ。上野原にある崖の割れ目を「^{ウァグァーバンタ}ウァグァーバンタ」と呼んだ。夜になると、ウァグァーバンタの方から三線の音や人の泣き声がしたという。戦争直前の上野原の崖下は、日本軍の暁部隊の燃料置き場で、米軍上陸前に、暁部隊が燃料を燃やして逃げたという話を聞いた。

（又吉栄亀／大正 5 年生）

・墓の数はいっぱいあったからわからない。牧港の人の墓ではない。^{タシマ}他島（＝他の村）の人の墓。墓は「板墓」と呼んだ。墓口を板で塞いだ石積みの墓だった。

（又吉カマド／大正 4 年生、又吉ウシ／大正 6 年生）

・戦前まで、墓の前で畑をしていた。墓は岩を掘り込んだものやガマを利用したものがあつた。墓口を板で塞いでいたのを覚えているが、墓の所有者や数はわからない。上野原の崖下の墓は、牧港の人の墓ではないと思う。清明祭の時にも墓に来る人を見たことがなかつた。

（小橋川正雄／大正 10 年生）

牧港橋について（名称、戦前・戦後の状況、特徴など、改修牧港橋碑について）

・昭和 10 年頃、風もない風の時に突然、「ドーン」と音がして、行ってみると牧港橋が崩れていたの覚えている。

（宮里正光／大正 9 年生）

・橋は「レンガ橋」と呼んだ。牧港から宇地泊に架かる最初のアーチ部分がレンガでできていた。レンガになったの何時からかわからないがレンガになる以前は石でできていたという話を聞いたことがある。戦前はアーチが五つあったと思う。宇地泊側の橋を「北の橋」と呼んだ。

碑文は宇地泊側にあった。文字が書かれていたの覚えている。戦後、どうなったのかは不明。

（比嘉政長／大正 15 年生）

・橋は「レンガ橋」と呼んだ。牧港から宇地泊に向かって、最初にレンガ橋が一つ、石橋が二つで、アーチが三つあり、仲座商店、^{メーヒジャ}前比嘉の屋敷があって、そこから離れて宇地泊側に碑文があった。碑文を過ぎて、アーチが二つある「北の橋」があった。碑文の南側にも暗渠があった。これもアーチだったかもしれない。

私が 15 才の頃にレンガ橋が壊れて、橋の修理の仕事をした。作業員は 20 数名いた。私が一番最年少だった。レンガ橋は修理されて、コンクリートの橋に変わった。

戦後、碑文はどうなったかわからない。トラックに乗って宇地泊で軍作業をしていたが、碑文は無かったと思う。

（又吉盛秀／大正 9 年生）

・橋は、牧港側を「^{フェースハン}南の橋」、宇地泊側を「^{ニシヌハン}北の橋」と呼んだ。昭和 10 年頃の橋工事は覚えているが、工事には参加しなかった。牧港の人たちも何人か工事作業に出ていた。

北の橋の近くに茅葺屋、少し離れて「仲座」、「比嘉」の屋敷があった。北の橋の南側と茅葺屋のあいだに碑文があった。

（又吉蒲戸／明治 45 年生）

・碑文は、現在の A&W の入り口にあった。戦後も残っていてその場所に埋められている。

（仲村義一／大正 6 年生）

・橋は、「マチナト橋」とか「レンガ橋」と呼んだ。明治以前は石橋だったという。「北の橋」は宇地泊側の橋。北の橋のたもとに碑文があった。碑文は漢字で書かれていた。高さは 1 m、厚さ 10 cm、幅は 60 ～ 70 cm 位あったと思う。碑文は戦後、軍道一号線工事で埋められたと思う。

レンガ橋を過ぎて、仲座商店、メーヒジャグァー（＝屋号「前比嘉小」）の屋敷があった。屋敷を過ぎて北の橋があった。レンガ橋はアーチが三つ、北の橋はアーチが二つあった。仲座商店の手前側から嘉数に行く道があって、50 m 位進むとポンプ場があった。レンガ橋のたもとから西側は、小橋川と仲座の畑があった。

（又吉栄亀／大正 5 年生）

第 5 章 まとめ

調査した 3 号墓は、渡慶次喜貞氏からの聞き取り調査と現地立ち合いの結果(註)、宜野湾ノ口の墓と断定した。本章では、同ノ口墓の造営背景及び年代について、また、消失した 2 基の並列墓やその他の横穴跡について、事実関係と若干の考察を加えてまとめとする。

註) 渡慶次喜貞氏は、ノ口墓の上方に亀裂が有り、間に巨岩が挟まっていたことを記憶していた。この亀裂に挟まった巨岩は現在まで残っており、宜野湾ノ口の墓の位置が確定できた。

1. 宜野湾ノ口墓の造営背景・年代

嘉手苅門中の伝承が事実であれば、橋の築造年代をノ口墓の造営年代と捉えることができる。しかし、牧港橋は架橋・改修の二時期に大別され、どの時期に宜野湾ノ口が関与したかという問題や所轄村(=祭祀権)の問題もある。ここでは、第 4 章で述べた発掘調査成果に加え、以下の事象の事実関係を整理し、同墓の造営背景と年代を推察する。

文献資料：宜野湾ノ口

① 『おもろさうし』 卷十五 (1623 年) 【うらおそいおもろのふし】 一節目 「一 ぎのわんののろの 」	この頃、浦添間切の一公儀ノ口であった。 しかし、所轄した村名・数は不明。
② 『琉球国由来記』 卷十四 (1713 年編纂) 殿二 (キセラセノ大ヒヤ・大里の大ヒヤ) 麦稻四祭時、両所へ、穂三筋完(芋。 同村百姓中) シロマシー器、 根人共レ之。同巫 ニテ祭祀也。	同巫=宜野湾ノ口 この頃、宜野湾間切の 6 ヶ村(宜野湾、伊佐、喜友名、神山、嘉数、我如古)を所轄した。

：牧港・宜野湾・大謝名の地名

表 2

	文 献 名	おもろさうし (1623 年)	絵図郷村帳 (1649 年)		琉球国由来記 (1713 年)
地 名 (間切名)				宜野湾間切新設(二六七一年)	
牧 港		— (浦添間切)	まひミなど (浦添間切)		牧 湊 (浦添間切)
宜 野 湾		ぎのわん (浦添間切)	宜 湾 (浦添間切)		宜 野 湾 (宜野湾間切)
大 謝 名		ちやな (浦添間切)	大志やな (浦添間切)		大 謝 名 (宜野湾間切)

ノロ制：琉球において本格的にノロ制が敷かれたのは、第二尚氏王統三代目の尚真王の治世で、聞得大君を筆頭とする三十三君のノロ（＝中央神女）が置かれ、王国の政治的組織に組み入れられた。同時に、各間切にもノロ（＝公儀ノロ）が置かれ、間切内の数村の祭祀を束ねた。しかし、17世紀中葉～末頃にかけて、公儀ノロの祭祀権（＝所轄村）が流動的であったことが「羽地仕置」から読みとることができる。

「羽地仕置」によると、1667年（寛文7）に王府から公儀ノロの間切・所轄村外での祭祀を禁止する通達が出されている。このことは、間切・村の新設が増加するこの時期に、ノロの祭祀権が揺らいでいたことを裏付けている。この資料は、同時期の浦添間切と宜野湾間切（1671年設置）の間にも、同様の事態が起こりえたことを示唆している。

聞取調査：戦後、ノロ墓移転に伴い、石厨子2基（身のみ）を移葬している。この石厨子について、石質や形態、銘書の有無などを聞き取り調査したが、年代に関連するような情報は得られなかった。

出土遺物：3号墓の基盤直上土から釉葉の異なる二種類のマンガン釉甕形厨子甕の破片が出土した。上述の石厨子2基を考慮すると、少なくとも4基の蔵骨器が墓に安置されていたと思われる。

戦前の表土面から、15世紀頃の中国産陶磁器が、また、その下層からグスク土器や有孔貝製品が出土している。これらの遺物は、隣接する牧港遺跡（グスク時代～近代）の出土事例と類似することから、同遺跡の広がりか推測された。一方、県内の古墓の発掘事例をみると、墓室から貿易陶磁が出土する事例が増加しており、これらの遺物が墓に伴う副葬品の可能性もある。

人骨分析：3号墓客土中及び旧表土直上層から断片的に出土した細片であったが、「成人男性」、「熟～老年女性」、「成人女性」、「小児」、「幼児」が確認された。聞き取り調査の「3人のノロ」と一致しないが、ノロ墓にはノロ以外の親族が葬られることもあり、画一的なことは分かっていない。

特筆すべきは、「熟～老年女性」、「成人女性」が確認できたことである。

写真資料：墓は、前面をあいだ積みで構築する。太陽光のあたる部分から墓庭があることが確認できる。また、墓庭手前側には崩落しかかった石階段が取り付いている。形態は破風墓に類似しており、規模は同資料と発掘成果から、概ね4.5×2.5×3m（幅×高×奥行）が推定される。

同墓は、ノロが葬られる池城墓（1670年造営：今帰仁村）と規模や性格が類似するほか、墓を崖の中腹に造営する小禄墓（1494年「おろく大やくもい石棺銘」：宜野湾市）や百按司墓（15世紀頃：今帰仁村）などの古琉球期の墓の立地条件を踏襲している。

間切名	ノロ名	所轄村	ノロ墓の所在する村
浦添	仲間	仲間・安波茶・西原・伊祖・牧港・前田	仲間
	沢岬	沢岬・安謝・内間	沢岬
	仲西	勢理客・小湾・仲西	仲西
	饒平名	饒平名・宮城・屋富祖・親富祖	—
宜野湾	城間	城間	—
	宜野湾	宜野湾・我如古・伊佐・嘉数・喜友名・神山	牧港
	謝名	謝名・宇地泊・真志喜・大山	宇地泊
西原	野嵩	野嵩・安仁屋・普天間・新城	野嵩？
	幸地	幸地・翁長	幸地
北谷	棚原	棚原	棚原
	北谷	北谷・前城・玉代勢	北谷
越来	仲宗根	仲宗根・呉屋・諸見里・山内	仲宗根 → 呉屋
	知花	知花・登川・池原	知花

表3 公儀ノロの墓と所轄村（西原、北谷、越来、美里については、墓が確認できるノロを表記した。）

(1) 墓の造営背景について

1671年以降、宜野湾間切6ヶ村を所轄した宜野湾ノロであるが、その墓が浦添間切牧港村に造営された背景には、同ノロが浦添間切時代に牧港村を所轄したことが考えられる。このことは、表3の事例で公儀ノロの墓が所轄した村に造営されていることを理由としている。

また、嘉手苅門中の伝承で牧港橋架橋に関与とあるが、これが事実ならば、宜野湾間切設置後、60年余経過した1735年の石橋改修時の関与は、「羽地仕置」の事例や仲間ノロの所轄村であることから考えにくく、「球陽」に記述される木杠時代（万暦年間）の関与を想定する。

(2) 墓の造営年代及び使用期間について

墓の造営年代は、先述した造営背景を考慮して16世紀中葉～17世紀中葉（宜野湾間切創設以前）と想定する。また、墓の使用期間は、聞き取り調査にある代理ノロの存在や4基の蔵骨器から、19世紀までと想定する。

2. その他の墓や横穴跡について

(1) 並列墓（PL. 30参照）

9号トレンチを設定した場所は、戦前まで2基の墓が並列して所在した。しかし、ここは基盤石灰岩まで著しく攪乱されていたため、遺構は確認されなかった。遺物は、現況の基盤上から、ボージャー厨子甕の口縁部や底部破片、キセル雁首などが一括遺物として採取された。

戦前の写真や牧港の古老等の聞き取り調査から、この2基墓について概述する。墓の形態は、宜野湾ノロの墓同様、破風墓に類似しており、規模も概ね同等と思われる。墓庭の有無は判然としない。2基墓のうち向かって左側の墓は、墓口を含む前面を全て石積みで構築する。両墓とも墓前方に石階段が取り付けられている。今調査では、所有者は不明であったが、昭和50年頃の同場所の写真（PL. 51）から所有者の存在を窺い知ることができる。

特筆すべきは、墓の屋根部が長方形の長板数枚で構成されていること。造営年代は不明だが、古琉球期若しくは近世初期に位置付けられる古式タイプの墓と想定される。

(2) 沖縄戦以前の横穴跡

4～6号横穴跡は、①墓造営の際に要する石材を採石した跡、②一次葬（仮墓）のため掘り込まれた跡、③牧港橋架橋または補修の際に使用する石材を採るために生じた跡などが考えられる。

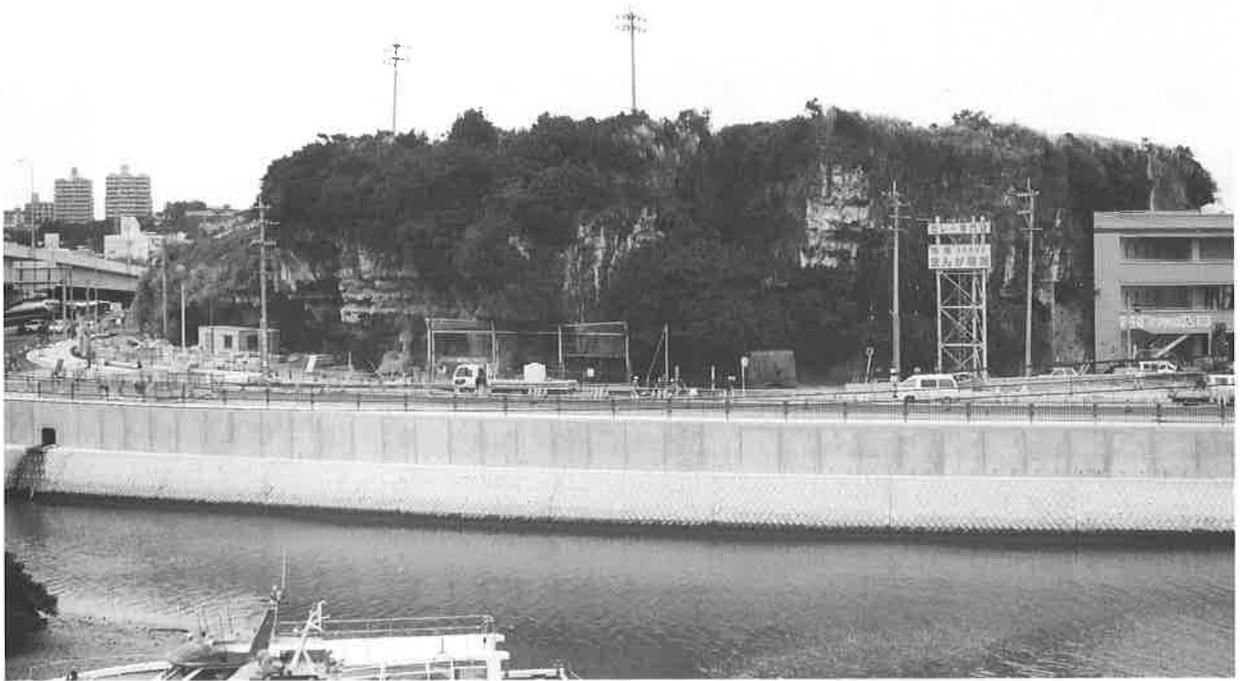
1号横穴跡は、立面形態が3×8×0.6m（高×幅×奥行）と長方形を呈する。戦時中あるいは戦後の採石のためか奥行きが全くないが、規模や形態、立地条件から、今帰仁村運天の木郭墓を納めるための掘込形態を想定する。

参考文献

- 牧港字誌編集委員会 平成7年3月 『牧港字誌』 浦添市牧港自治会
- 字仲間誌編集委員会 1991.12 『字誌なかま』 浦添市仲間自治会
- 沢岨字誌編集委員会 1996.5 『字誌たくし 浦添市字沢岨』 沢岨字誌編集委員会
- 浦添市史編集委員会 1989.3 『浦添市史第1巻 通史編 浦添のあゆみ』 浦添市教育委員会
- 浦添市史編集委員会 1981.3 『浦添市史第2巻 資料編1 浦添の文献資料』 浦添市教育委員会
- 浦添市史編集委員会 1983.3 『浦添市史第4巻 資料編3 浦添の民俗』 浦添市教育委員会
- 浦添市史編集委員会 1986.3 『浦添市史第6巻 資料編5 自然・考古・産業・歌謡』 浦添市教育委員会
- 浦添市史編集委員会 1988.3 『写真にみる浦添のあゆみ -明治から昭和62年-』 浦添市教育委員会
- 沖縄県史料編集所 1981.2 『沖縄県史料 前近代1 首里王府仕置』 沖縄県教育委員会
- 沖縄大百科事典刊行事務局 1983.5 『沖縄大百科辞典』 沖縄タイムス社
- 沖縄地域史協議会編 1989.3 『シンポジウム南島の墓 沖縄の葬制・墓制』 沖縄出版
- 角川日本地名大辞典編纂委員会 昭和61年7月 『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 角川書店
- 金武正紀他 1998.3 『銘苺古墓群（Ⅰ）那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅴ』 那覇市教育委員会
- 金武正紀他 1999.3 『銘苺古墓群（Ⅱ）那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅵ』 那覇市教育委員会
- 金武正紀他 2000.3 『ナーチャー毛古墓群 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ』 那覇市教育委員会
- 西原町史編纂委員会 平成元年3月 『西原町史第4巻 資料編3 西原の民俗』 西原町役場
- 宜野湾市史編集委員会 昭和60年3月 『宜野湾市史第5巻 資料編4 民俗』 宜野湾市役所
- 呉屋義勝他 1989.3 『土に埋もれた宜野湾』 宜野湾市教育委員会
- 呉屋義勝他 1996.3 『奥間ノ口墓 一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書』 宜野湾市教育委員会
- 安里 進 1997.3 『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者 近世墓の考古学的調査による家族復元』 浦添市教育委員会
- 宮里信勇他 1999.3 『内間西原古墓群Ⅱ 浦添市消防署内間出張所および都市計画道路勢理客線造成工事に伴う緊急発掘調査』 浦添市教育委員会

写真図版 1

発掘調査及び出土遺物



▲ 北東から 写真下側は牧港川河口



▲ 南東から 中央の亀裂に挟まった巨岩下に宜野湾ノ口墓が存在する。

P L.1 牧港岩山の宜野湾ノ口墓遠景



◀ 正面

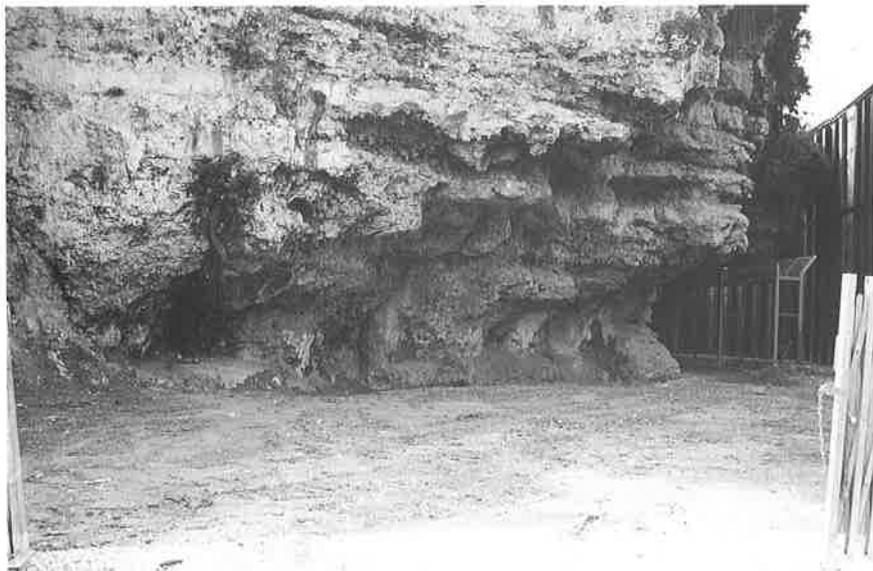


◀ トレンチ全景

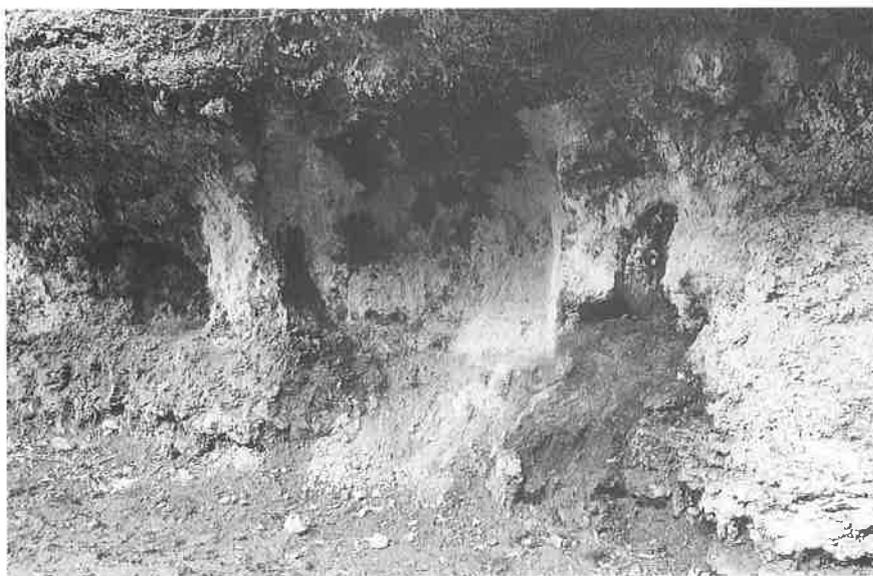


◀ 発破痕？

P L.2 1号横穴跡



◀ 2 ~ 6 号横穴跡



◀ 5・6 号横穴跡



◀ 4・5 号横穴跡

PL.3 2~6号横穴跡



◀ 奥壁



◀ トレンチ全景



◀ 墓室床面

P L.4 3号墓



◀ 墓庭造成の根石跡
(写真中央)

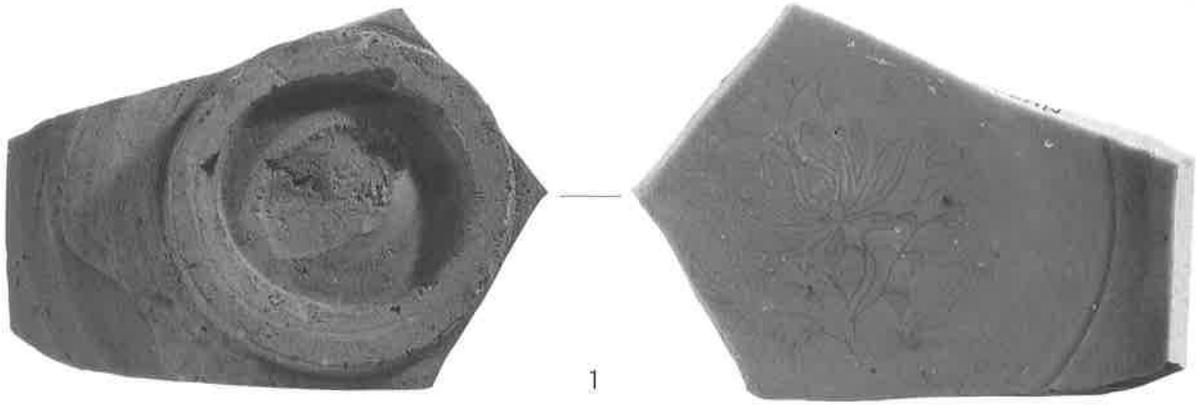


◀ 二次堆積土

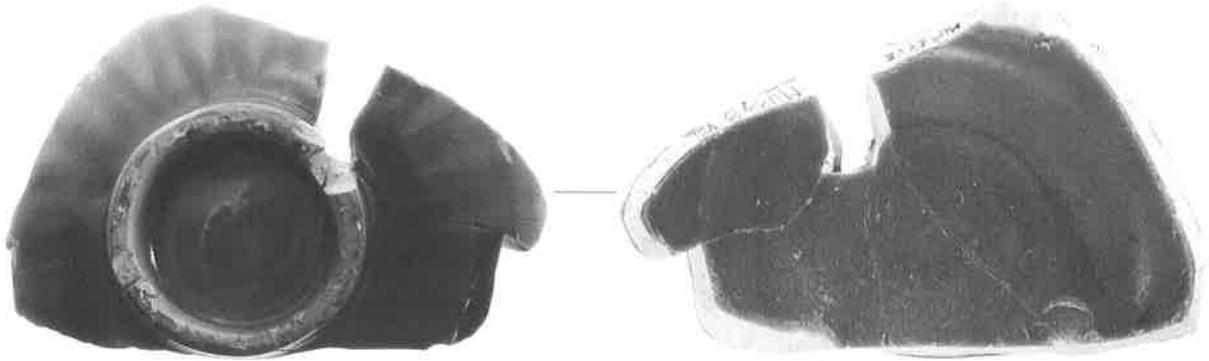


◀ 人骨出土状況

P L.5 3号墓



1



5



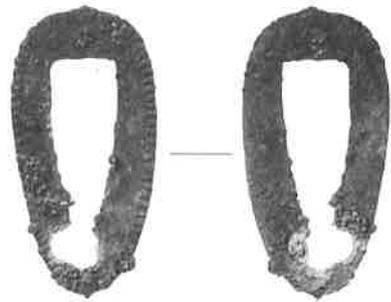
3



2



4



6



7

P L.6 (第7图) 3号墓出土遺物

白磁：碗(1) 青磁：小杯(2)・盤(3)・碗(5) 緑釉陶器(4) 切羽(6) 古銭(7)



1

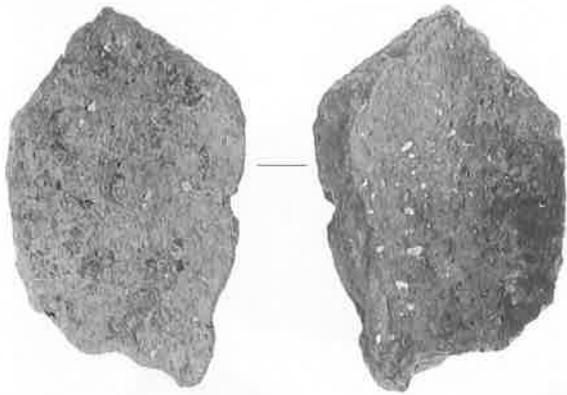


2



3

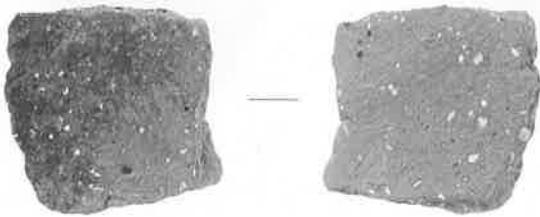
PL.7 3号墓出土遺物 マンガン釉甕形厨子甕：身(1、2)・蓋(3 第7図)



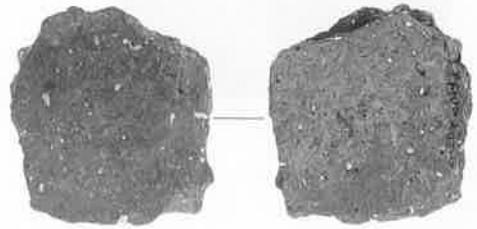
1



2



3

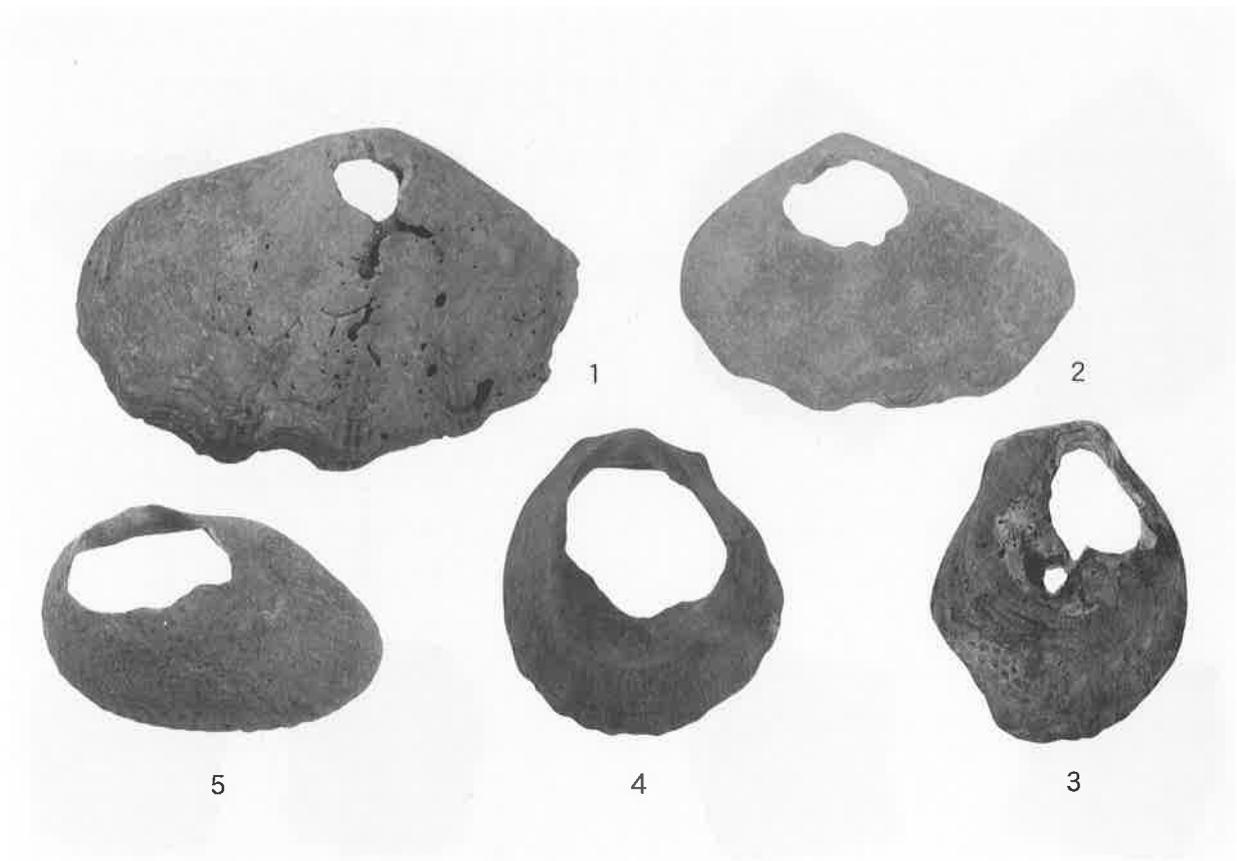


4



5

PL.8 3号墓出土遺物 グスク土器(1~4) 石器: 敲石(5 第8図)



PL.9 (第8図) 3号墓出土遺物

有孔貝製品：ヒメジャコ(1、2) メンガイ(3、4) リュウキュウサルボウ(5)



▲ 逆「L」字状の岩盤（写真中央）。戦前の写真でも確認できる。

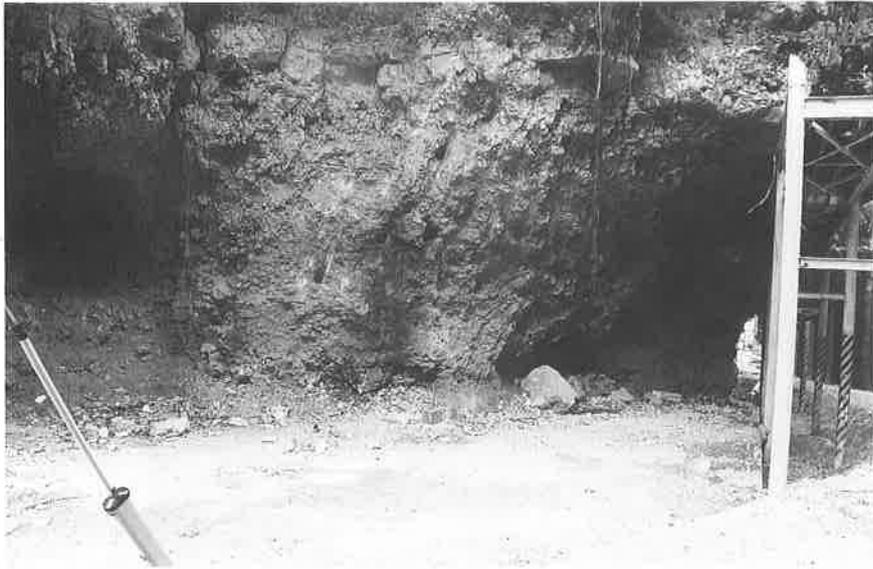


▲ 7号横穴跡（右下は重機の爪痕）



▲ 8号横穴跡

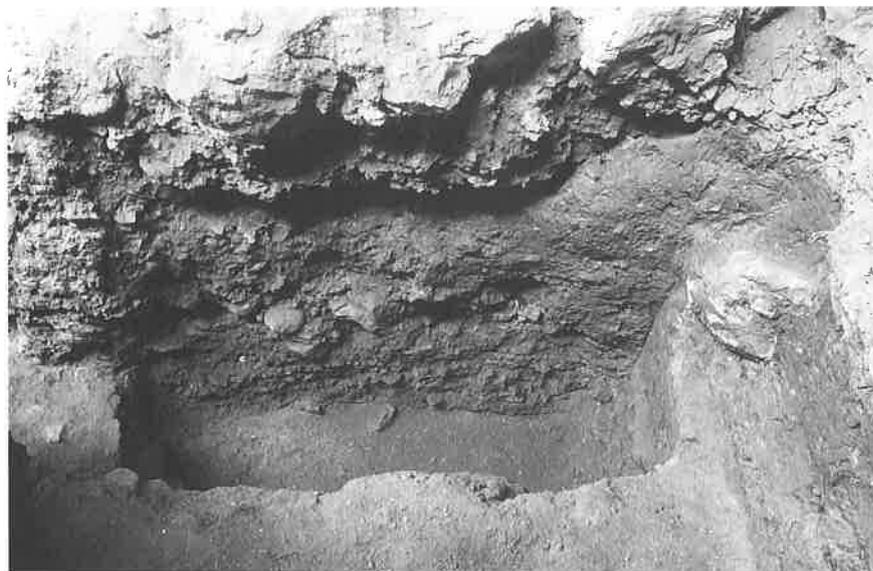
P L.10 7・8号横穴跡



◀ 発掘前



◀ 発掘後



◀ 二次堆積土

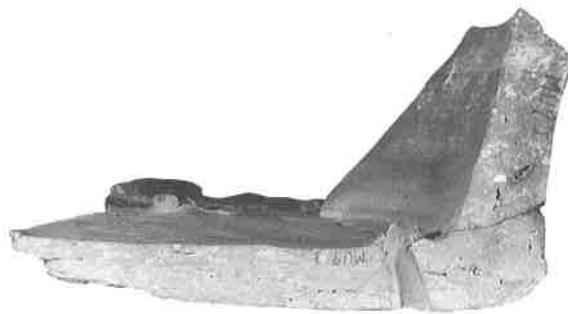
P L.11 9号横穴跡



1



2



3



4



5



6

PL.12 (第9図) 9号横穴跡出土遺物

蔵骨器：ポージャー厨子甕(1～3) キセル：陶製(4)・青銅製(5) 古銭(6)

写真図版 2

牧港岩山関係写真・絵図資料



P L . 13 遺跡一帯の空中写真
昭和 20 年 1 月 2 日
浦添市城間自治会蔵



P L.14 昭和 26 年 米陸軍工兵隊作成地図 浦添市立図書館沖縄学研究室所蔵



P L . 15 遺跡一帯の空中写真
昭和 37 年 (1962 年)
国土地理院所蔵



P L . 16 遺跡一帯の空中写真
昭和 52 年 (1977 年)
国土地理院所蔵



P L.17 遺跡一帯の空中写真 平成 7 年（1995 年） 浦添市資産税課所蔵



P L.18 遺跡一帯の空中写真 平成 11 年（1999 年） 浦添市資産税課所蔵



P L.19 「牧港の橋と堤道」 1853年 作／ハイネ
沖縄県立博物館所蔵 『ペルリ提督日本遠征記』より
牧港橋や岩山崖下の3基の墓が描かれている。



P L.20 「牧港」 大正7年 作／小杉未醒
沖縄県立博物館所蔵 『日本風景版画』琉球之部
牧港橋や改修牧港橋碑、民家、牧港岩山の様子が描かれている。



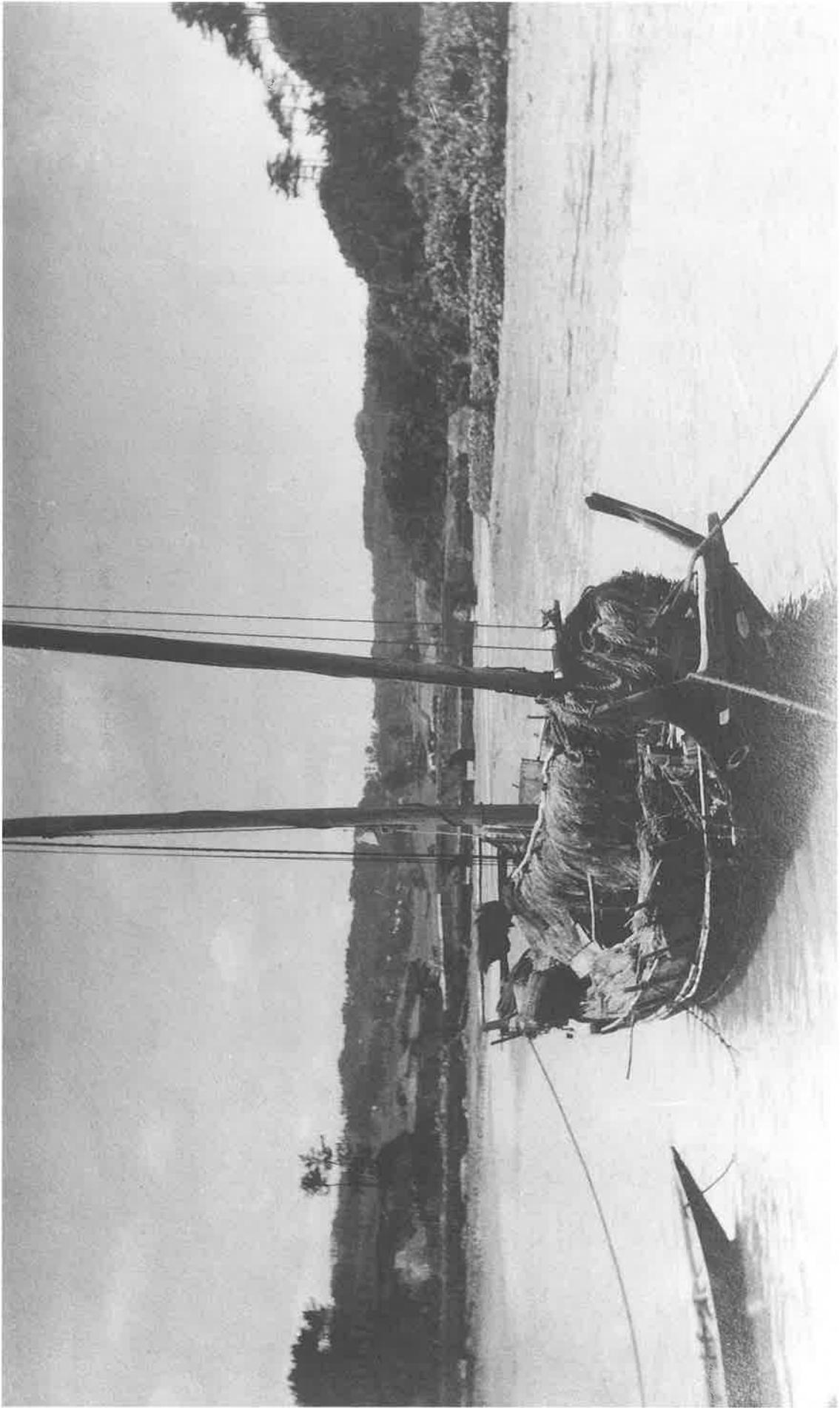
P L.21 「牧港」昭和7年 作／宮崎東里 沖縄県立博物館所蔵
 牧港岩山や入江の様子。牧港岩山の中腹に3基の墓を描き、墓前面の石垣部分を朱色で表現している。



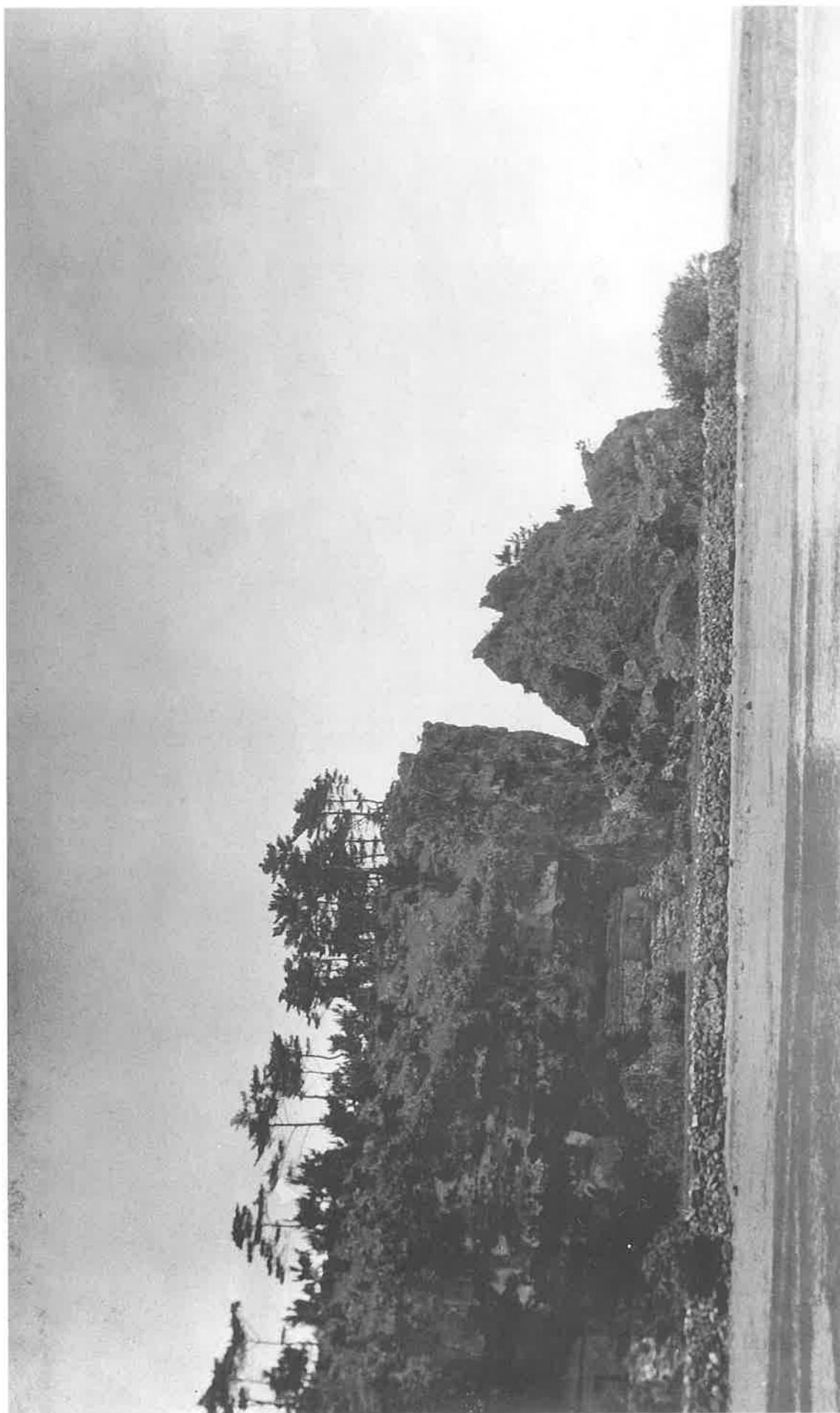
P L.22 「牧港風景」昭和33年 作／山田真山 読谷村立美術館所蔵
 この絵の構図は、同氏が描いた戦前のスケッチと同じことから、戦後に色付けしたものと思われる。牧港橋や入江、宇地泊側の田園風景、人々の様子が描かれている。また、中央奥には、牧港岩山に所在する墓が微かに確認できる。



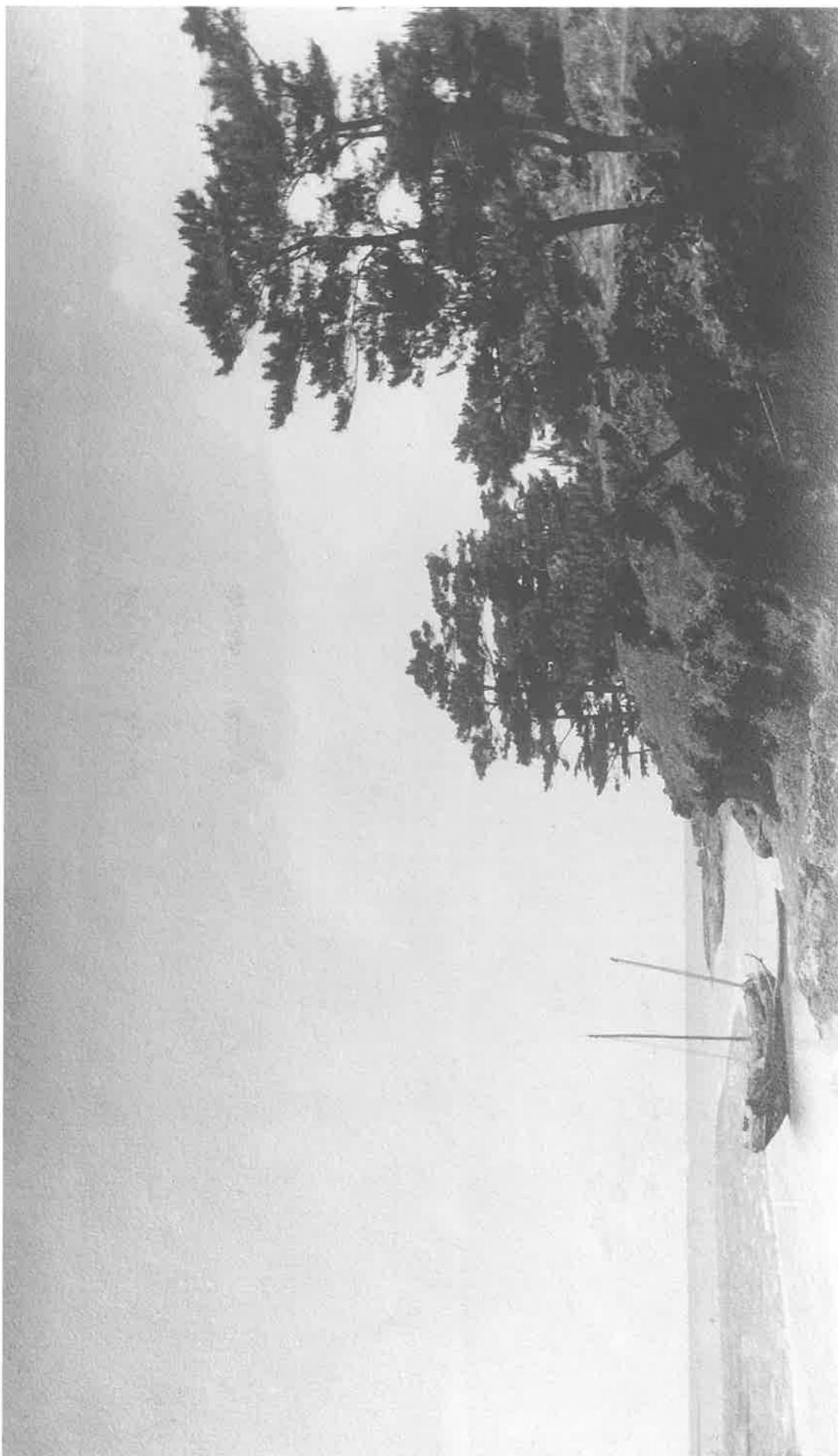
P L .23 「明治時代の風俗」明治年間 琉球大学付属図書館所蔵
牧港橋のもとに立つ農婦。橋の後方は牧港岩山の一連の丘陵で、頂部に松林が確認できる。



P L .24 明治末～大正 2 年 撮影／岡田雪窓 沖繩市立郷土博物館所蔵
山原船の後方に牧港橋が確認できる。橋から左側は仲座商店と屋号「比嘉小」の屋敷。右側は牧港岩山。



P L .25 明治末～大正2年 撮影／岡田雪窓 沖縄市立郷土博物館所蔵
牧港岩山の頂部の松林や崖中腹の3基の墓が確認できる。また、2基の並列墓の上方には、突出（オーバーハング）する巨岩が確認できる。

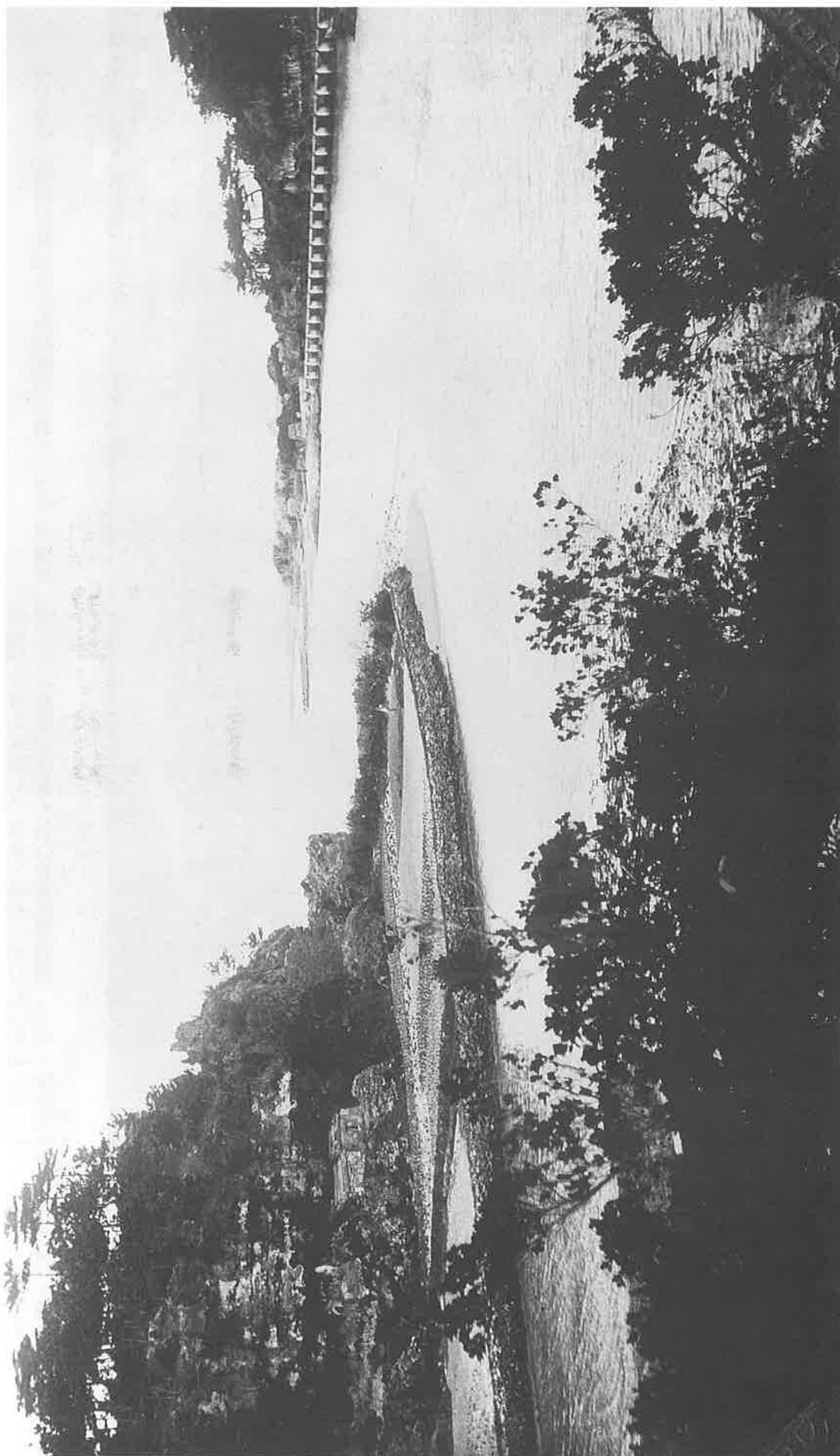


PL.26 明治末～大正2年 撮影／岡田雪窓 沖縄市立郷土博物館所蔵

牧港の入江風景。入江は浦添市牧港と宜野湾市宇地泊の境に位置しており、この写真は宇地泊側である。牧港はかつて天然良好の港を有し栄えたといわれており、同写真及びPL.24から、その名残を窺い知ることができる。



P L . 27 「牧港の墳墓」昭和7年 撮影／津留泰一 熊本県立図書館所蔵
牧港岩山の3基の墓や頂部の松並木が確認できる。

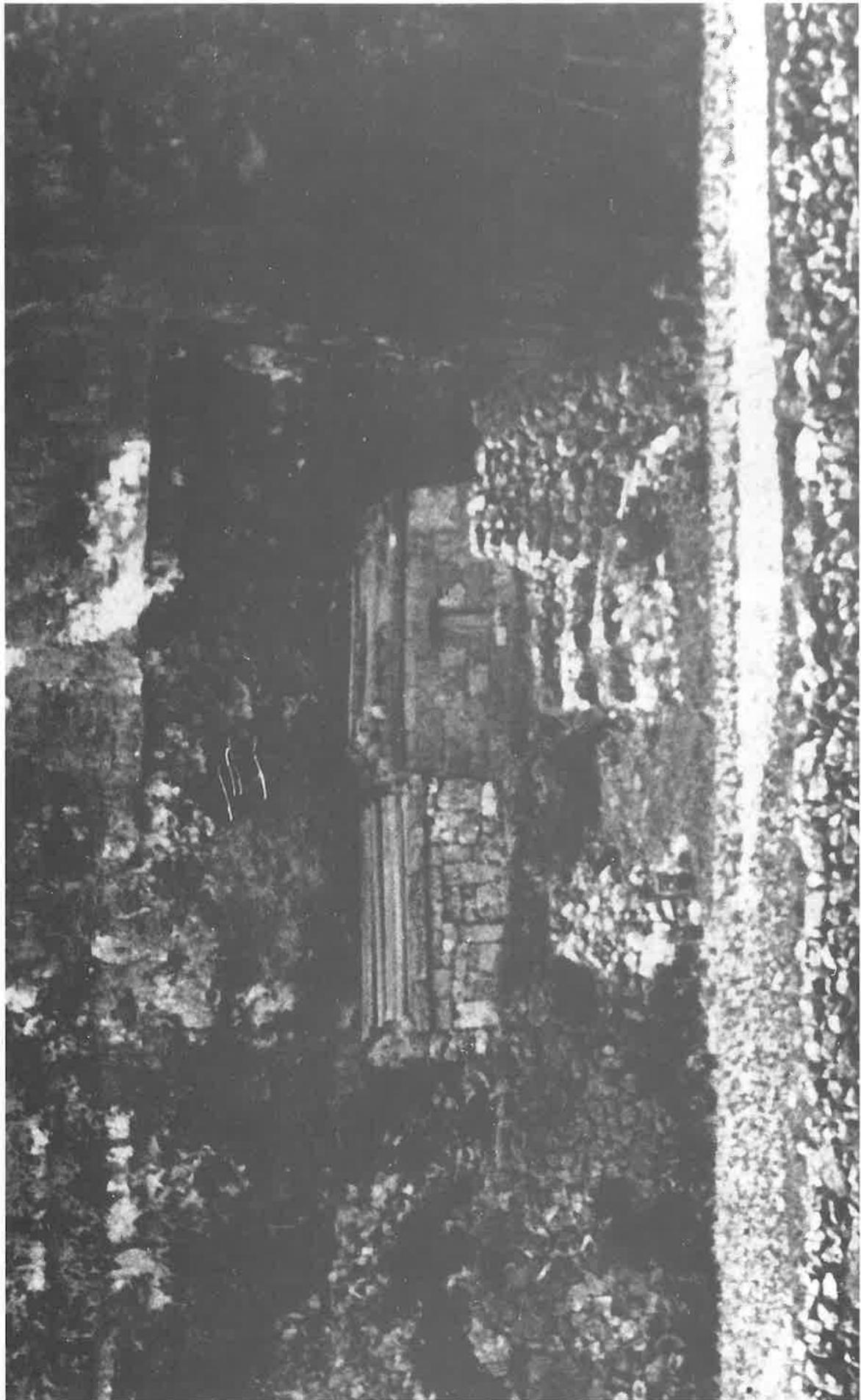


P L .28 「牧港」昭和7年 撮影／津留泰一 熊本県立図書館所蔵
牧港岩山の中腹にある2基の並列墓や入江の様子。右側は宇地泊で、牧港ポンプ場へ続く集水管がみえる。牧港岩山の崖下（墓の前面部）の広場は、畑作が行われていた。



P L.29 「牧港の墳墓」(PL.27)の部分拡大

宜野湾ノ口の墓。屋根は破風形を呈し、墓の前面をあいかけた積みで構築している。太陽光が当たる部分は墓庭で、手前側に崩落しかかった石階段が取り付いている。墓の右側上方には、亀裂に挟まった巨岩が確認できる。



P L .30 「牧港の墳墓」(PL.27)の部分拡大
墓の所有者は不明。両墓とも屋根は破風形を呈し、石階段が取り付く。左側の墓は屋根が板葺きで構築される。



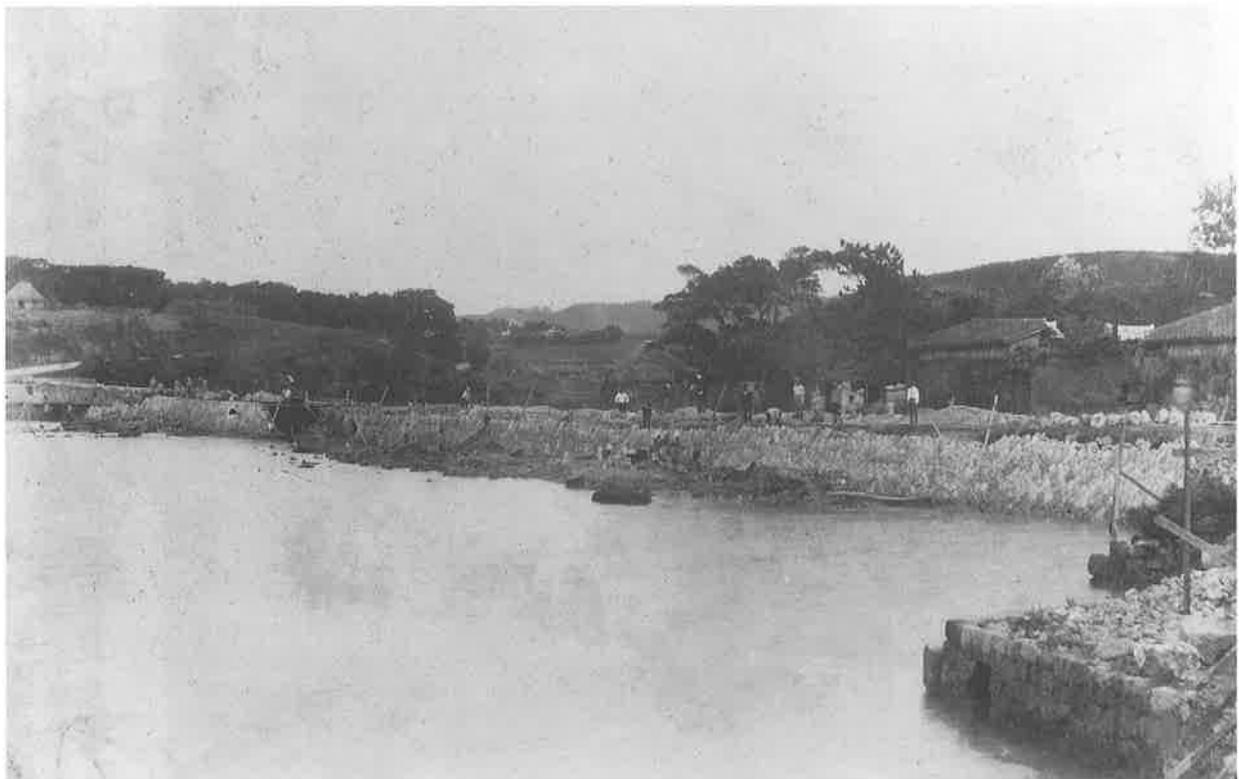
P L .31 「沖縄県中頭郡宜野湾村牧港橋」昭和9年 田辺泰著『琉球建築』より転載
通称、「北の橋」と呼ばれた宇地泊側の橋。中央の橋は、ハイネの絵(PL.19)に見られる
中国の駝背橋形式の橋。



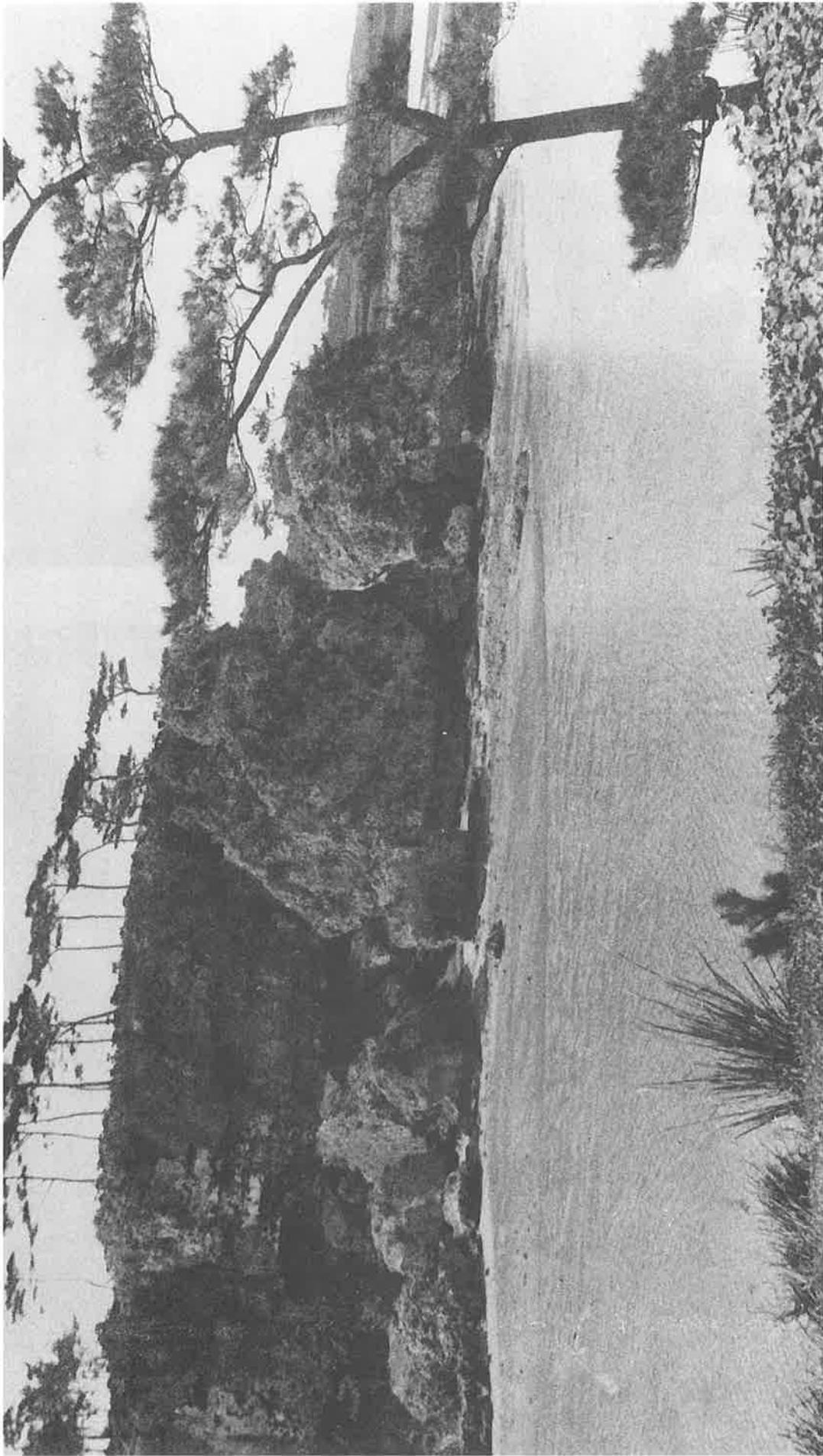
P L .32 「牧港橋」昭和9年 撮影／田辺泰 早稲田大学建築学科所蔵
橋の一部が崩落している。崩落した部分は通称「レンガ橋」と称される橋で、明治時代に
レンガで補修されたといわれる。また、橋の後方は牧港岩山の東側に延びる一連の丘陵
で、牧港貝塚や牧港遺跡が所在した。



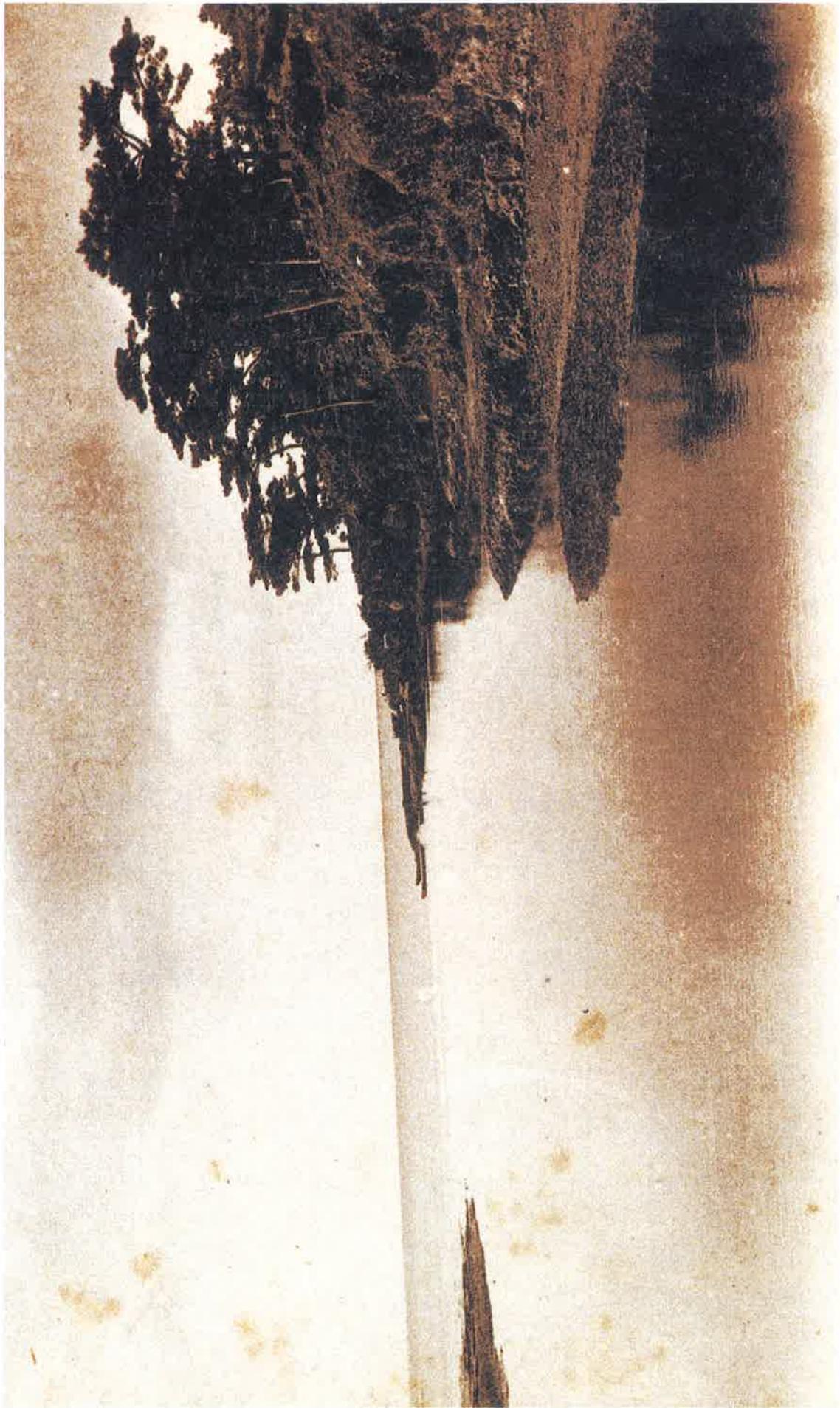
P L .33 昭和 10 年 写真提供／澤岷勝雄氏
 牧港橋補修工事の様子（P L . 32 の崩落したレンガ橋の補修工事）。この工事に関わった
 牧港在住の又吉盛秀氏（大正 9 年生）によると、橋は工事終了後、一週間もしないうちに
 崩れてしまい、再度、補修されたという。



P L .34 昭和 10 年 写真提供／澤岷勝雄氏
 写真の左側は宇地泊側で、茅葺きの屋敷や「北の橋」が確認できる。
 写真右側は、仲座商店（二棟）と屋号、「比嘉小」（茅葺き）の屋敷。



P.L.35 「沖繩県中頭郡大謝名停留場付近牧港の美景」昭和9年
沖繩国際大学南島文化研究所蔵『沖繩の写真帳』より転載
岩山の北東側。



P L.36 「琉球風景 牧湊」昭和10年頃 沖縄県公文書館所蔵
牧港入江の様子。この写真は当時、絵葉書として販売された。琉球風景「牧湊」と表記されている。



P L . 37
昭和 20 年
沖縄県公文書館所蔵

宇地泊の米兵。
岩山や牧港橋が確認
できる。



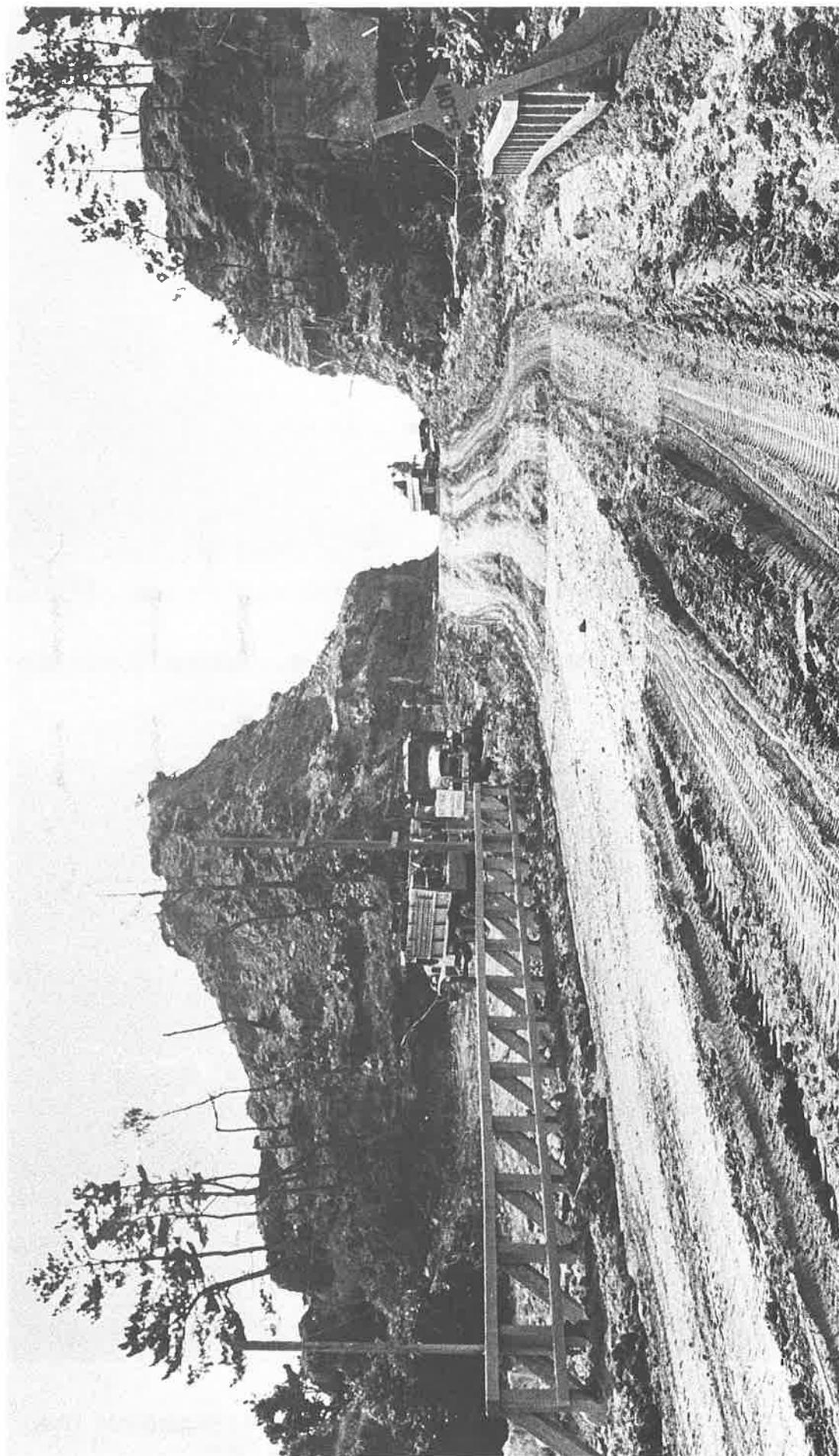
P L .38
昭和 20 年
沖縄県公文書館所蔵

宇地泊からみた牧港。
戦時中、宇地泊に米
軍キャンプが設営さ
れた。



P.L.39
昭和20年
沖縄県公文書館所蔵

北西側からみた牧港
岩山。写真左側に突
出した巨岩(オーバ
ーハング)が確認で
きる。



P.L.40 昭和20年 月刊沖繩社『日本最後の戦い』1977年発行
軍道一号線工事状況。写真手前側の鉄橋は牧港橋の一部で、戦時中に米軍が架橋した。写真左側の丘陵は、今日、県道153号線が開通して
住宅地が広がり、この写真の面影を全く残していない。



P L .41 昭和 23 年 撮影／宮城良雄 浦添市牧港自治会所蔵
戦後の牧港岩山周辺の様子。写真手前側の道は嘉数高地へ続く。写真左側中央付近の建物は牧港ポンプ場。



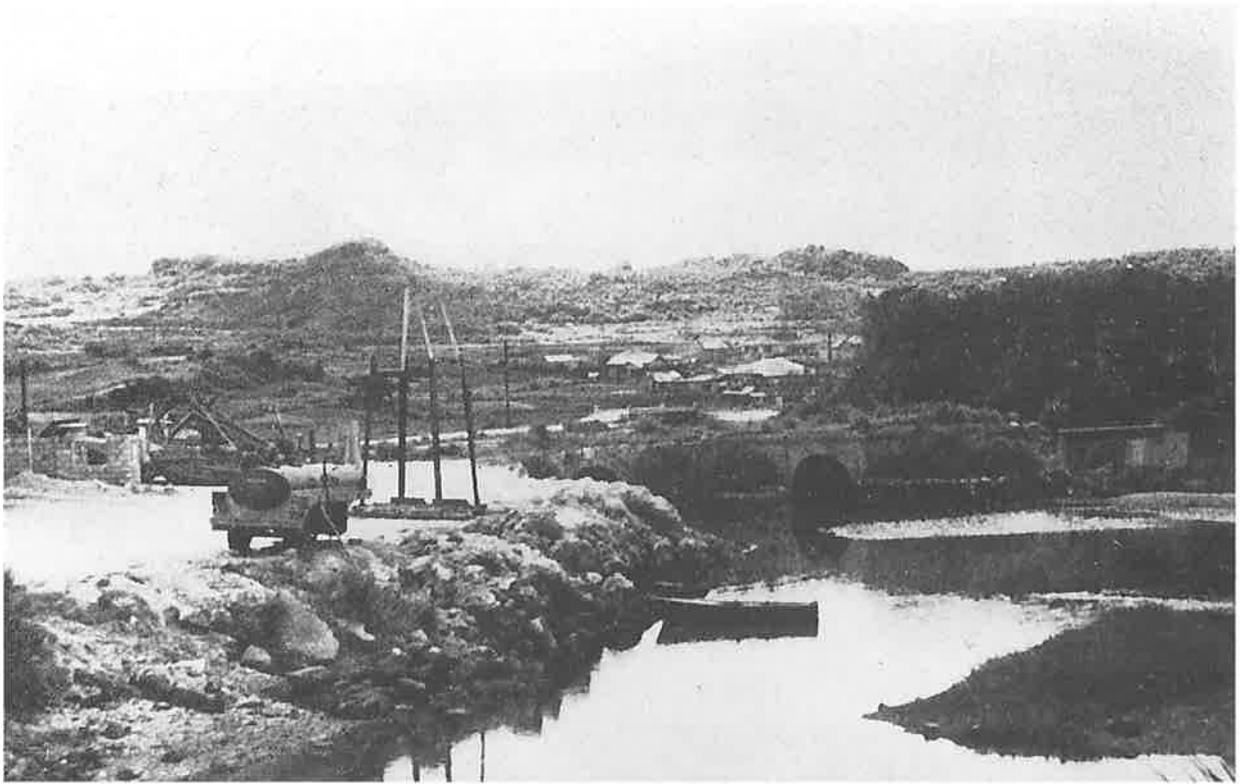
P L .42 昭和 23 年 撮影／宮城良雄 浦添市牧港自治会所蔵
牧港ポンプ場と牧港橋。写真中央付近は戦前の軽便鉄道跡。左側上部は嘉数高地（高台）、右側上部の丘陵は浦添グスクで、突出した為朝岩も微かに確認できる。



P L .43 昭和 27 年 撮影／太宰好夫 浦添市立図書館沖縄学研究室所蔵
写真左側の建物は牧港ポンプ場で、右側は牧港橋。牧港岩山の崖下から嘉数方面を撮影。



P L .44 昭和 27 年 撮影／太宰好夫 浦添市立図書館沖縄学研究室所蔵
牧港岩山のオーバーハングと宇地泊のコンセット。手前側の道路は軍道一号線。



P L.45 昭和 32 年 1957 年 沖縄タイムス社発行『新郷土地図 第 2 巻』より転載。
写真左側は牧港ポンプ場。中央から右側に牧港橋、入江、牧港岩山が確認できる。



P L.46 「牧港」昭和 36 年 撮影／山内良好
1961 年 琉球政府発行『琉球のあゆみ 10・11 合併号』より転載。
宇地泊上空から牧港岩山一帯を撮影。牧港橋や軍道一号線、入江の様子、牧港岩山頂部の教会などが確認できる。



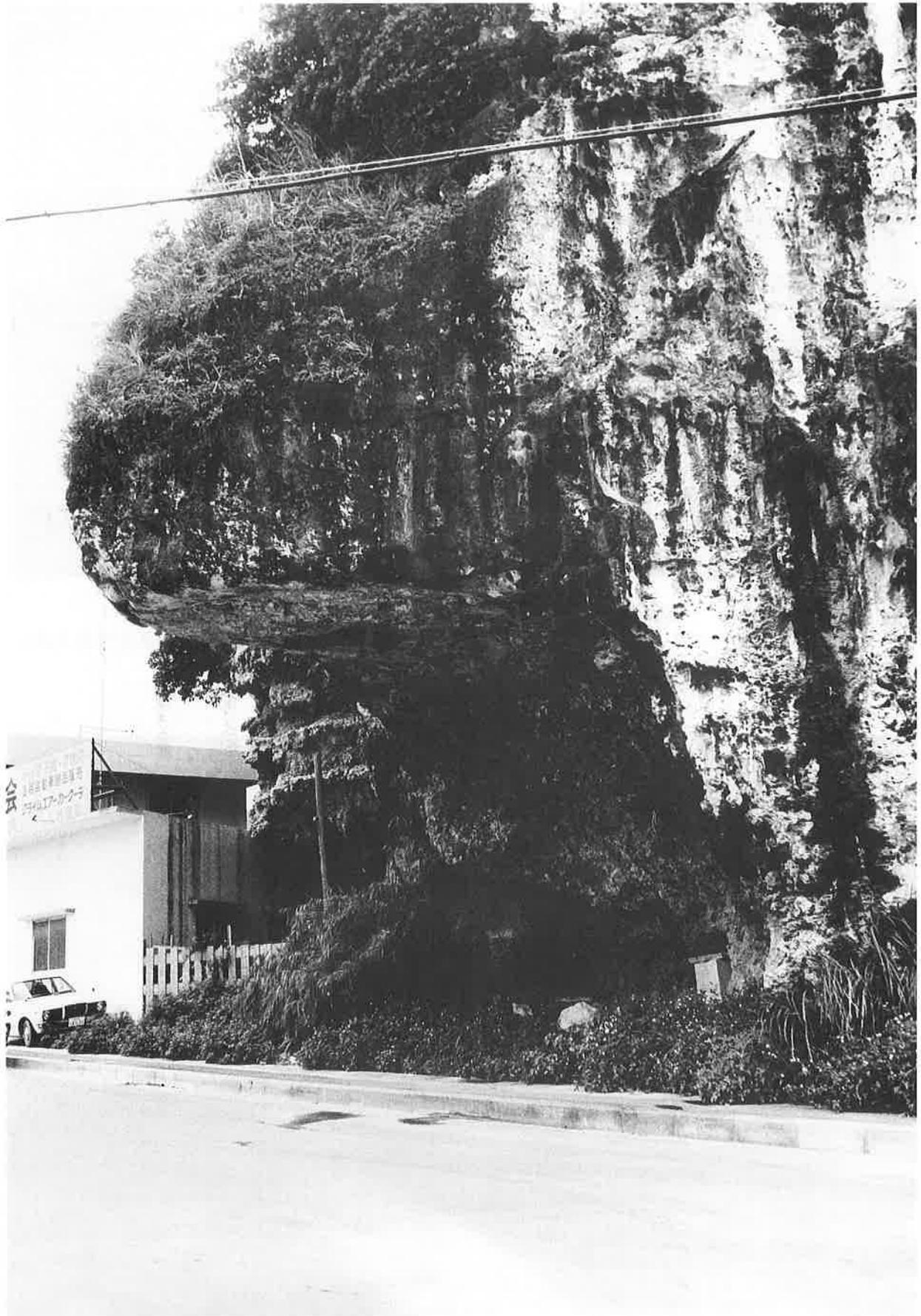
P L.47 「牧港」昭和 30 年代 撮影／佐久田 繁
1965 年 月刊沖繩社発行『おきなわ今と昔』より転載。
軍道一号線から牧港岩山を撮影。



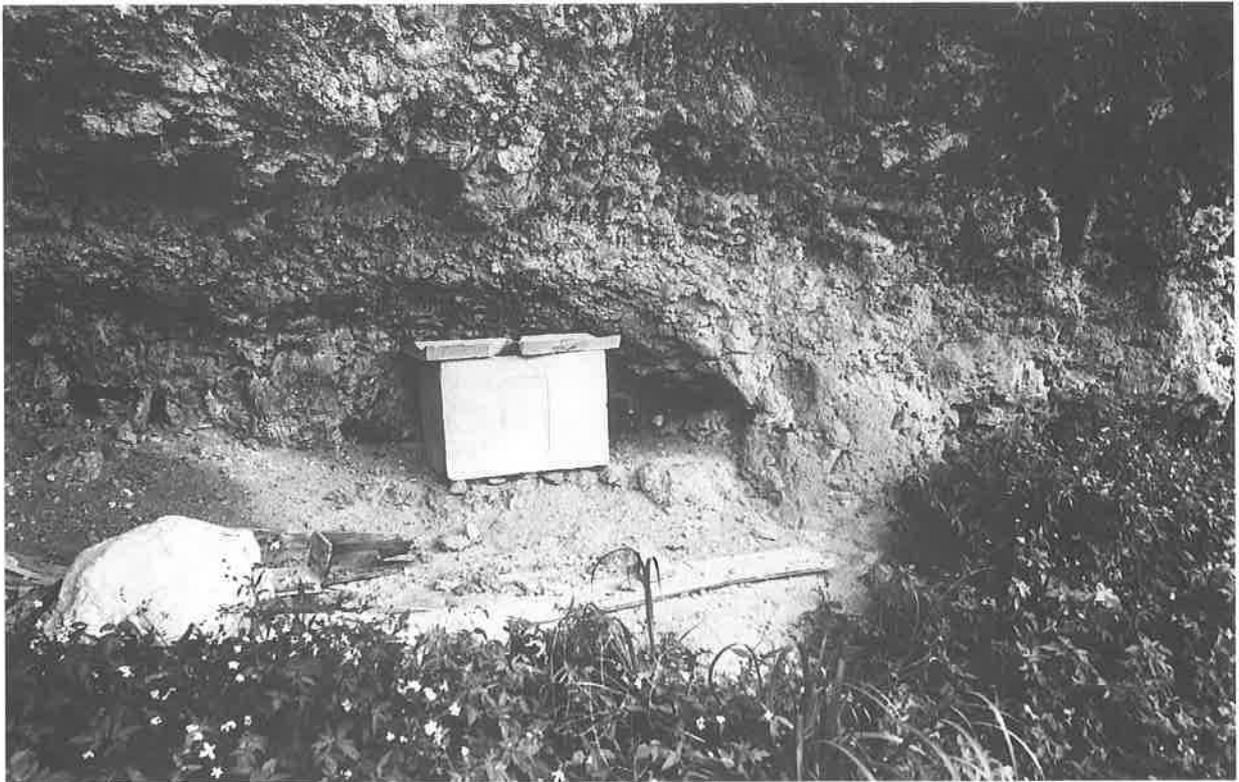
P L.48 昭和 40 年代 浦添市立図書館沖繩学研究室所蔵
牧港入江（牧港川河口）の様子。宇地泊のコンセットや牧港ポンプ場へ続く集水管などが
確認できる。



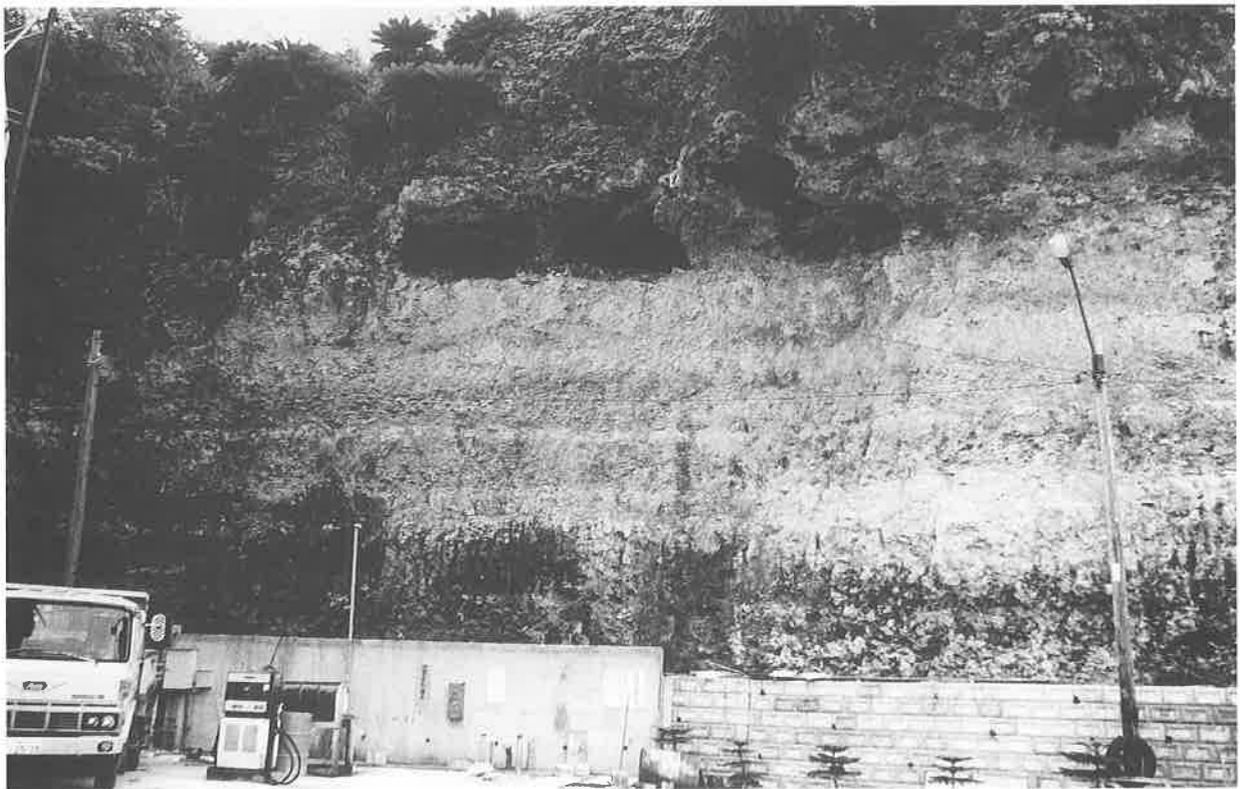
P L.49 昭和 50 年頃 撮影／浦添市教育委員会
この頃、牧港岩山の崖下には「ヤママディーゼル」が所在した。



P L.50 昭和 50 年頃 撮影／浦添市教育委員会
牧港岩山のオーバーハング。北西側から撮影。
オーバーハング下部にタンク墓が確認できる。



P L.51 昭和 50 年頃 撮影／浦添市教育委員会
オーバーハング下のタンク墓。戦前まで並列墓が存在した場所で、墓所有者の存在を窺い
知ることができる。しかし、今回の調査では所有者はわからなかった。



P L.52 昭和 50 年頃 撮影／浦添市教育委員会
牧港岩山の北西側。現在の牧港自動車学校裏側で、大きな洞穴が確認できる。



P L.53 昭和 50 年頃 撮影／浦添市教育委員会
横穴跡。今調査の 2 号横穴跡と思われる場所。



P L.54 昭和 50 年頃 撮影／浦添市教育委員会
横穴跡。今調査の 1 号横穴跡付近と思われる場所。



P L .55 昭和 56 年 撮影／長間安彦 浦添市立図書館沖縄学研究室所蔵
牧港の入江風景。



P L .56 平成 7 年 撮影／浦添市教育委員会
牧港岩山を南東側から撮影。写真中央の亀裂部分に挟まった巨岩が確認できる。宜野湾ノ
口の墓はその直下に所在する。また、写真右側にオーバーハングする巨岩が確認できる。

牧港岩山の地質・植生について

牧港岩山の地質について

沖縄県立教育センター

大城逸朗

牧港は、集落地帯の北部に北西～南東方向の嘉数断層、南部に浦添断層が推測され、その両断層に挟まれた地域に位置しています。嘉数断層は、その形跡が比屋良川として、また浦添断層は港川から伊祖に至る高台として認められます。これら両断層は、沖縄島を東西に胴切りする断層として、島の成り立ちを知る手がかりとなる大事な地質構造です。

地質は、米軍の軍用地質図（1959）を参照すると、灰色の粘土（方言でクチャ）からなる島尻層群（今から300万から170万年前）とこれを不整合におおう琉球石灰岩層（今から120万から数10万年前）からできています。牧港岩山の岩質は、サンゴや貝の破片、有孔虫などの化石を含む琉球石灰岩中の有孔虫殻砂石灰岩です。多孔質で、固い部分と軟らかい部分が互層状になり、層理がよく発達すること、どこか離れた場所で形成されたサンゴ礁が破砕され、再堆積してできたということです。牧港岩山をつくる石灰岩の形成年代は、更新世前～中期（今から120万から50～60万年前）で、層理がはっきり観察でき学校教材としては最適な露頭です。

牧港岩山は、地形学的には石灰岩堤をつくっています。海や川に面した崖状地形のことです。おそらく石灰岩の地層が形成後、断層活動で土地が切れ、あるいは切れた弱線部が川へと発達します。このような経過で形成された崖は、その後風雨にさらされて再結晶し、次第に固結します。このことを表面固化作用（ケースハードニング）と呼び、牧港岩山はこれが崖状の独立した丘として残ったと考えられます。なお石灰岩堤は熱帯～亜熱帯地域特有の地形でもあります。

海や川に面した崖の基部には、ノッチと呼ばれるV字型の刻み目が見られます。これは海や川の水によってできた地形で、当時の海面あるいは川面の高さを示します。つまり、現在のノッチの高さを調べることで、海面の変動、あるいは土地の上下の動きなど地殻変動を知る手がかりになります。ノッチはこの牧港岩山の基部にも明瞭な形で認められます。

牧港岩山は、国道側で数本の節理や亀裂が認められます。岩石の性質からすると粘っこく壊れにくいのですが、亀裂があるとブロック崩壊の恐れもあります。

牧港岩山及び周辺踏査

日 時：平成 11 年 11 月 26 日（金）

指導助言：大 城 逸 朗（沖縄県立教育センター）

資料作成：安 和 吉 則

(1) 牧港岩山の石灰岩の性質について

牧港岩山の石灰岩は、那覇石灰岩とよばれる沖縄の代表的なサンゴ礁性の石灰岩で、岩の強度（硬質・軟質）で二分できる。

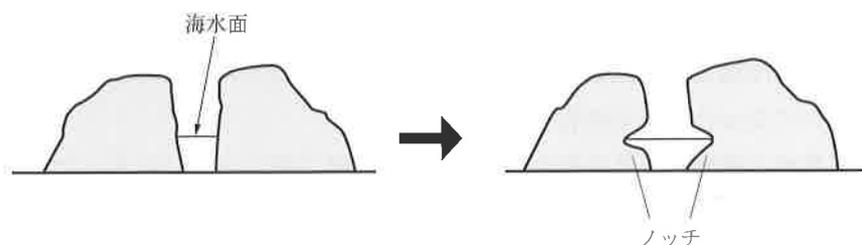
- ・硬質石灰岩 …… 既に露出している岩上面や崖表面が風雨にうたれて溶けてまた固まる（表面固化作用）。その繰り返して、岩が緻密になり（再結晶作用）、硬質の石灰岩となる。
- ・軟質石灰岩 …… 表面が露出しない岩層の内部は、サンゴ礫が後に砂とまざり砂利として堆積したもので非常に柔らかい石灰岩となる。

(2) 牧港岩山の生成過程について

かつてサンゴ礁として発達した地形である。その後の地殻変動で隆起し、断層に沿って浸食が進み、牧港川となった。その川の下刻作用が一層進み、その川で二分されたのが現在の地形である。

(3) ノッチについて

- ・ノッチは石灰岩の海岸の基部に見られるくびれた地形で、その形成は海水面あるいは土地の上下動の際の海蝕作用によってできる。現在の牧港川を挟んだ牧港岩山の基部と宇地泊の両対岸で確認できる。
- ・岩質（硬軟等）によって「くびれ」の深さに差異がみられる。
- ・ノッチの生成過程



(4) 周辺踏査による洞穴観察

牧港岩山を外周して三箇所の洞穴や一箇所の割れ部分を確認した。洞穴はいずれも洞開口部が直線的で、洞長も 3 m 弱で岩奥壁にあたり、人工的に造られたものと考えられる。自然洞は、洞長が洞口直径の 2 倍以上あるものをいう。

岩が崩落し、洞穴をおもわせる部分は、牧港岩山北側の自動車教習所裏側でみられるが、割れ方から自然落盤によって生じたように思われる。割れ部分の原因が造成工事によるものかは不明。

牧港岩山の植生について

沖縄国際大学

仲田 栄二

浦添市の緑率は6%である。この緑は、砂岩の墓域や河川域や琉球石灰岩の断崖地に比較的まとまって残存する。前者のタブノキ極相林域にはオオバギーアカギ群集や二次林などの代償林が、中者には自然植生のオオバギーアカギ群集が、後者には自然植生のハマイヌビワ・ガジマル群落や代償林が分布している。

これらの自然植生や代償植生（植林を除く）は、沖縄戦における森林火災跡からの再生林であろう。種組成や構造からみても、これらの林は植生遷移の途中相に位置していると言える。

浦添市の植生景観は、戦前と戦後とでは差が大きい。如何にして、土地本来の植生景観の復元や保全・保護をすべきかは、今日的課題になっている。

今回、牧港岩山の植生を調査する機会に恵まれたので、その概観について報告する。

1. 岩山の植生

岩山（海拔20m前後、琉球石灰岩）の頂部や断崖面の植性を調査した結果、9個の植生データから6群落が発見された。ほかに、3群落が実見された。

1.1 自然植生

1.1.1 風衝地頂部の低木群落

岩山の頂部の前面には、アカテツ・オキナワシャリンバイ群落が発達している。この群落は風環境の勾配によって、風上側は低木群落となり、一方、風下側では亜高木群落まで発達している。

群落の亜高木層と低木層には琉球列島の海岸の風衝地植生を特徴づけているオキナワシャリンバイ・トベラ・アカテツ・フクマンギ・グミモドキ・ソテツ・リュウキュウクロウメモドキ・ネズミモチ・ゲッキツ・アコウ・ハマイヌビワ・ガジマル・ヤブニッケイ・マサキ・ツゲモドキなどが出現する。

この群落は琉球列島の海岸風衝地の極相群落（林）であるアカテツ・ハマイヌビワ群集に含まれるべきであるが、ここではいくつかの理由で別名にした。

この群落は岩山の風衝地の植物生態系の核をなし、さらに植生景観の中心にもなっている。このことは植物社会の法則から、現在だけではなく、過去もそうだったと言える。

1.1.2 風衝地断崖面の植生

断崖面では、矮生低木群落のハリツルマサキ群落とテリハクサトベラ群落、つる植物群落（よじのぼり植物群落）のアマミズタ群落とオオイタビ群落、小型草本群落のホウライシダ群落などが中小の面積でモザイク状に生育している。

将来この核になる植生は、よじのぼり植物群落のアマミズタ群落とオオイタビ群落であろう。

断崖下部には、ガジマルやアコウが亜高木をなして小面で生育している。

1.1 代償植生

風衝地頂部のアカテツ-オキナワシャリンバイ群落の破壊跡地には、同群落の代償植生であるススキ群落・チガヤ群落・タチアワユキセンダングサ群落などの草本植生が広い面積で存在する。

断崖下部には、群落を形成していないギンネムなどがみられる。

2. 岩山の植生の保全と復元

既述の通りアカテツ-オキナワシャリンバイ群落は、岩山の植物生態系の核であると同時に植生景観の中心になっている。しかし、生育面積が小さいために同群落の安定度は極めて低い。この群落の環境圧に対する安定度を考えるならば、同群落の代償生域での復元が早急に望まれる。

牧港岩山の採石資料について

－ 浦添市立牧港小学校での保存・活用 －

浦添市教育委員会文化課が牧港岩山を発掘調査している頃、一方では同地域にある牧港小学校の改築基本計画検討が同検討委員会によって行われていた。同委員会の基本計画である「学び空間を創造する」というコンセプトを考えるにあたり、浦添の歴史・牧港の歴史の話を聞きたい、地域の歴史を踏まえた校舎改築を検討したいとの申し出が文化課にあり、勉強会の席が設けられた。また、勉強会の席では牧港岩山の発掘調査が話題となり、調査に至った経過や調査成果を説明することになった。

同委員会から「牧港岩山の象徴的な岩（オーバーハングした岩）を活用して学校の一角にモニュメントを建てたい」「学校改築の部材の一部に岩山の石を活用し、子々孫々へ伝え残したい」等の要望がでた。その要望を踏まえ、市文化課と同委員会の代表者で沖縄総合事務局南部国道事務所と嘉手納国道出張所に「牧港岩山の岩の一部提供」を相談したところ、岩の提供をこころよく引き受けて下さった。

岩の切り取りは運搬が可能な3～4 t以内との制限があったが、牧港岩山の象徴的な部分であるオーバーハングした岩のノッチ面をできるだけ範囲に入れた。

提供のあった岩の具体的な活用については、校舎改築が平成13年度以降ということもあって牧港小学校校舎改築検討委員会に一任した。

牧港岩山の岩の活用にあたっては、那覇石灰岩の名称の際に基準になった岩であること、一帯が風光明媚なところで景勝地として古くから絵に描かれ写真に撮られていること、ランドマークとしての牧港岩山を念頭においた活用をお願いする次第である。また、本市教育委員会として岩の活用の際には出来る限りサポートする考えである。



◀ 岩石の選定：採石前

▼ 牧港小学校グラウンドに提供された牧港岩山の岩石



牧港岩山関係写真・絵図資料一覧表（1）

PL.	「タイトル」 / 内容	(撮影/作)年	(撮影/作)者	所蔵・出典
	空中写真	S19 (1944)	米軍	国土地理院 (27,000 分の 1)
		S19 (1944)	米軍	国土地理院 (27,000 分の 1) 3 倍拡大
13	空中写真	S20 (1945)	米軍	浦添市城間自治会
		S20 (1945)	米軍	国土地理院 (48,000 分の 1)
		S20 (1945)	米軍	国土地理院 (48,000 分の 1) 3 倍拡大
14	/MACHINATO	S26 (1951)	米陸軍工兵隊	浦添市立図書館沖縄学研究室 (4,800 分の 1)
15	空中写真	S37 (1962)	米軍	国土地理院 (32,000 分の 1)
16		S37 (1962)	米軍	国土地理院 (32,000 分の 1) 1.5 倍拡大
		S45 (1970)		国土地理院 (10,000 分の 1)
		S52 (1977)		国土地理院 (10,000 分の 1)
		S59 (1984)		国土地理院 (20,000 分の 1)
	S59 (1984)		国土地理院 (20,000 分の 1) 2 倍拡大	
17	空中写真	H03 (1991)		浦添市資産税課 (5,000 分の 1)
18		H07 (1995)		浦添市資産税課 (5,000 分の 1)
		H11 (1999)		浦添市資産税課 (5,000 分の 1)
19	「牧港の橋と堤道」	(1853)	ハイネ	沖縄県立博物館所蔵『ペルリ提督日本遠征記』
20	「牧港」	T07 (1918)	小杉未醒	沖縄県立博物館所蔵『日本風景版画』琉球之部
21	「牧港」	S07 (1932)	宮崎東里	沖縄県立博物館
22	「牧港風景」	S33 (1958)	山田真山	読谷村立美術館
23	「明治時代の風俗」	明治年間		琉球大学附属図書館
24	/山原船と牧港橋	明治末	岡田雪窓	沖縄市立郷土博物館
25	/牧港岩山と墓	〃		
	/牧港入江	大正初年		
	「牧港」	T06 (1917)	ホーレー	ハワイ大学宝玲叢刊編纂委員会 / 著『望郷沖縄第 2 巻』本邦書籍 1981 年発行
	「牧湊」	T06 (1917)	ホーレー	ハワイ大学宝玲叢刊編纂委員会 / 著『望郷沖縄第 4 巻』本邦書籍 1981 年発行
27	「牧港の墳墓」	S07 (1932)	津留泰一	熊本県立図書館山崎文庫
28	「牧港」			同上
29	/宜野湾ノ口墓			同上:PL.27 部分拡大
30	/並列墓			同上:PL.27 部分拡大
31	「沖縄県中頭郡宜野湾村牧港橋」	S09 (1927)	田辺 泰	早稲田大学建築学科建築史研究室
32	「牧湊橋」			田辺泰 / 著『琉球建築』座右宝刊行会 1972 年発行
33	/牧港橋補修工事近景	S10 (1935)		沢岬勝雄 (那覇市首里大名)
34	/同上遠景			

牧港岩山関係写真・絵図資料一覧表（2）

PL	「タイトル」 / 内容	(撮影/作)年	(撮影/作)者	所蔵・出典
35	「沖縄県中頭郡大謝名 停留場付近牧港の美景」	S09 (1934)		沖縄国際大学南島文化研究所所蔵『沖縄の写真 帳』三好鉄一 / 編『沖縄の写真帳』鹿児島三州 コロタイプタイムス社 1934 年発行
36	「琉球風景牧湊」	S10 (1935)		沖縄県公文書館
	「牧の港源為朝出立ノ地」	S10 頃		琉球新報社『絵はがきにみる沖縄—明治・大正・ 昭和—』1993 年発行
	/ 牧港上空から / 宇地泊上空から / 米軍架橋の牧港橋	S20 (1945)		Charles・E・Tuttle,CO『OKINAWA THE LAST BUTTLE』 浦添市城間自治会所蔵 那覇市経済文化部歴史資料室所蔵
37	/ 宇地泊の米兵	S20 (1945)		沖縄県公文書館
38	/ 牧港遠景			
39	/ 牧港岩山北西部			
40	/ 軍道一号線工事	S20 (1945)		月刊沖縄社『日本最後の戦い』1977 年発行
41	/ 牧港遠景 / 牧港岩山北西部 / 牧港橋	S23 (1948)	宮城 良雄	浦添市牧港自治会
42	/ 牧港橋とポンプ場			
43	/ 牧港橋	S27 (1952)	太宰 好夫	浦添市立図書館沖縄学研究室
44	/ 牧港岩山			
45	「牧港橋」	S32 (1957)		沖縄夕仏ス社『新郷土地図』沖縄第 2 巻中部篇 1957 年発行
46	「牧港」	S36 (1961)	山内 良好	琉球政府『琉球のあゆみ』10・11 合併号 1961 年発行
47	「牧港」	S30 年代	佐久田 繁	月刊沖縄社『おきなわ今と昔』1965 年発行
48	/ 牧港川河口風 / 牧港川河口風景	S40 年代 S40 年代		浦添市立図書館沖縄学研究室
49	/ 牧港岩山南東側	S50 年頃		浦添市教育委員会文化課
50	/ 牧港岩山			
51	/ タンク墓			
52	/ 牧港岩山北西側			
53	/ 横穴跡			
54	/ 横穴跡			
55	「牧港入江」	S56 (1981)	長間 安彦	浦添市立図書館沖縄学研究室
	/ 牧港入江	H01 (1988)		浦添市教育委員会文化課
56	/ 牧港岩山	H07 (1995)		浦添市教育委員会文化課
	/ 牧港岩山	H12 (2000)		浦添市教育委員会文化課

報告書抄録

ふりがな	まきみなといわやまのぎのわんのろばか							
書名	牧港岩山の宜野湾ノ口墓							
副書名	一般国道 58 号宜野湾バイパス事業に伴う緊急発掘調査							
巻次								
シリーズ名	浦添市文化財調査研究報告書							
シリーズ番号	第 31 集							
編著者名	安和吉則							
編集機関	沖縄県浦添市教育委員会文化課							
所在地	〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶一丁目1番1号 TEL:098-876-1234 (内6216)							
発行年月日	2001年(平成13年)3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぎのわんのろばか 宜野湾ノ口墓	おきなわけん 沖縄県 うらそえし あざまきみなと 浦添市字牧港	47208		26° 15' 49"	127° 43' 42"	2000.4.25 ↗ 2000.6.19	150	国道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宜野湾ノ口墓	古墓	近世	破風墓 1基 横穴跡 8基	石製品 貝製品 グスク土器 中国産陶磁器 沖縄産陶器 蔵骨器 古銭 キセル雁首				

浦添市文化財調査研究報告書 第31集

牧港岩山の宜野湾ノ口墓

— 一般国道58号宜野湾バイパス事業に伴う緊急発掘調査 —

発行日 2001年(平成13年)3月30日

発行所 浦添市教育委員会

〒901-2501 浦添市安波茶一丁目1番1号

TEL 098-876-1234 (内線 6216・6217)

FAX 098-878-1487

印刷 文進印刷株式会社 浦添営業所